

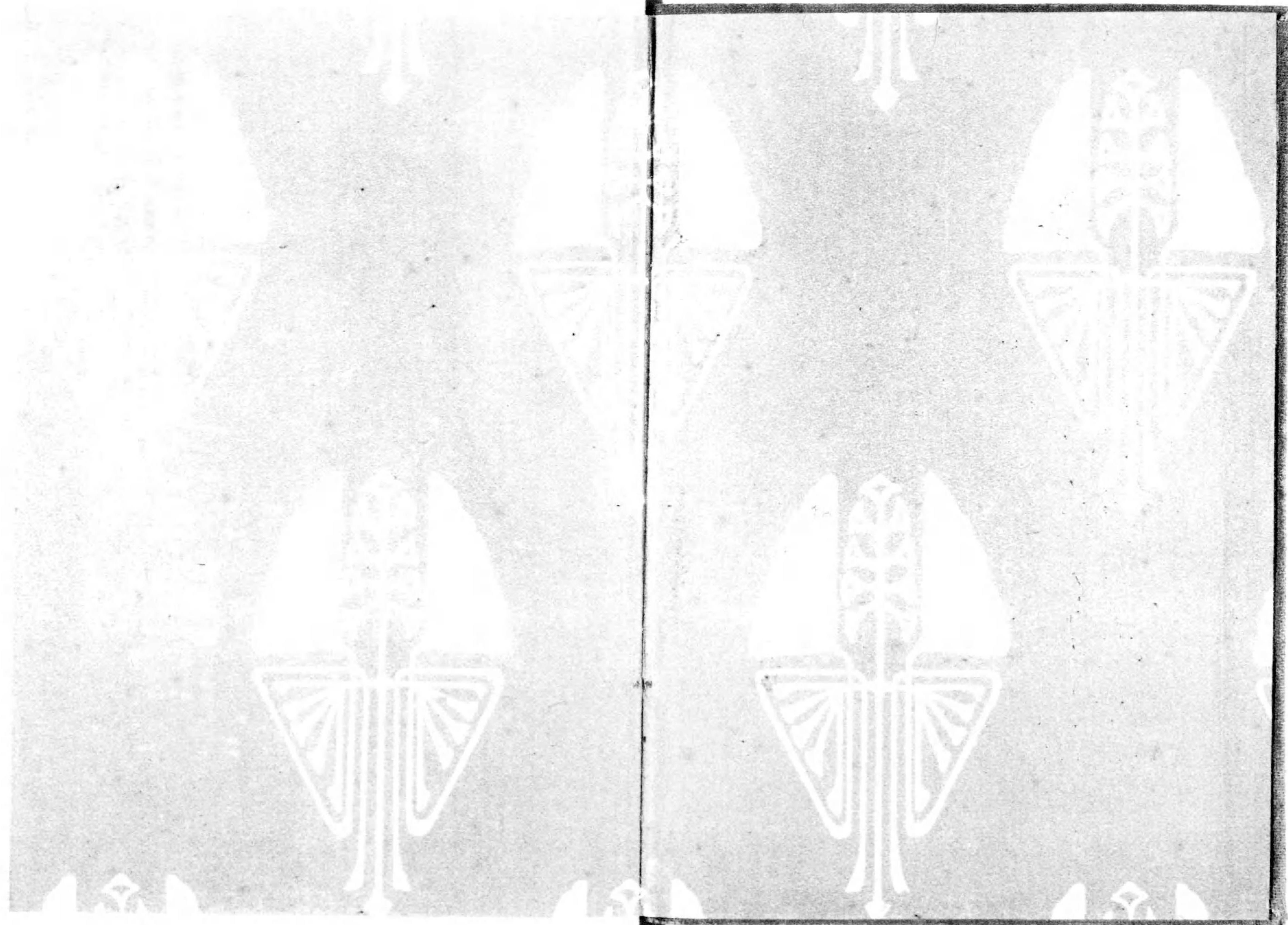
大正文庫

天下之豪傑揃

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

始









特100
69

1 次 目

天下の豪傑揃ひ

目次

- 是れは牛の角搦へ……………
- 柳生流の極意八間飛び切りの術……………
- 已れ僧くい坊主め……………
- 癩に憐む婦人……………
- モシ大變が出来ました……………
- 此奴は丸で化物……………

大正
2. 3. 25
内交

三

三

三

- 流石の武藏も驚いた……………五
- 金比羅さんの御神酒……………六
- 一刀を取つたまゝ、海の中へドブ……………七
- ことによつたら天狗の再来……………八
- お師匠さんはギツネ……………九
- 十八貫五百目の錫杖でコツリく……………一〇
- 一人二人は面倒だ……………一一
- 七合入の盃で駿け三杯クツと飲んだ……………一二

- 十三ヶ月目に出産……………一三
- 病氣の元は……………一四
- 彼れは泥棒の子……………一五
- 殺生禁斷の場所で鶴を目かけてツトン……………一六
- 悪人が善人で善人が悪人……………一七
- 意外な出来ごと……………一八
- スツクと立ちあがつた白髪の老人……………一九
- 證據は落した小刀……………二〇

天下の豪傑揃ひ

○此れは牛の角構へ

駈々堂編纂部編

今回お勤めに依りまして出版致しまするは、徳川二代三代將軍時代の豪傑揃ひ、殊に其内にも世に隠れたる奇談を申上ります、之れは後に至りまして紀州高野山に夥多の豪傑が集りまして、紀州大納言家宣公の同勢三百人を向方へ廻し、血の雨を降らしますると云ふ、一大騒動を惹き起すの講談でございます、毎度申上げる通り勇士、豪傑は實に少ないものでござりますが、茲に豊前の國企救郡小倉に於て、十二萬石小笠原右近將監の家臣で、劍道の指南

目 次 終

- 箕ヶ嶽でも帯ヶ嶽でもよい……………一九
- 勝つべき腕があるから勝つた……………二〇六
- ヤツと云ふ聲に五六間……………二二四
- 強い筈だ師匠の師匠……………二三三
- 横惚れの横惚れ……………三三八
- 其女は己れが貰つた……………三三七
- 千仞の谷の上で宙にアラリ……………二四七

役を勤め、高八百石を頂戴致して居りまする宮本七太夫と云ふ人がござりました、此人の養子になりましたのが、幼名を七之助、後に宮本武藏正名と云ふ名高い天下の豪傑でござります、此の人は七才の折、世に勇名なる劍客有馬喜兵衛信賢と立會を致し、敵の左の眼を潰したと云ふ、實に實の生る木は花にして異なり、梅檀は嫩葉にて芳しと云ふ譬への通り、後に世の中に名前を残す人は子供の間から非凡の所がござります、此の宮本の生立は大抵御承知の事と思ひますからお預りと致しまして、一人前に成長を致した所から申上ります。さて武藏は武勇の奥義を極めて、遂に新免二刀流と云ふ流名を編み出しました或る時小笠原右近將監殿へ宮本お目通を致しまして

武「ハッ恐れ乍ら我が君へお願ひ申上げまする右「何ぢや武「私にこれより三箇年の間日本六十餘州を漫遊致したうござります、世の中には有らゆる天下には名人、上手が澤山ござります、一度國々を廻りまして名人、上手に出

逢ひ立合を致して武を磨きたいと云ふ考へでござりまするが「何卒お許しの程を願はしう存じまする右「オ、夫れは何より結構の事だ、國々を漫遊すると云ふ事は大いに之れは宜しい事である、然らば其方の願ひに免じ三年の暇を遣はす」

と早速お聞き届けになりました、そこで主君より備前の國長船の住人祐定の刀を餞別として外に金子壹百兩を賜はりました。

そこで武藏は第一着に遙々大和の國と志し郡山の御城下を指して段々と遣つて参ります。

大和の國郡山の城は要害堅固に致しまして遠くは從一位關白太政大臣豊臣秀吉公の御舍弟、大和大納言秀長公が百萬石の御格式を以て築かれた處で御座いますから申々の名城で、當時は十二萬石松平佐渡守殿が城主でござります、ソレで武藏は日數を重ねて漸々郡山の城下へ遣つて参り、

アラく歩いて参りますると、何れかで撃剣の音が致します。固より武藝熱心の宮本でござりまするから。

武「ア、これは何處かに道場があるな、一番寄つて立合をして見やう」と撃剣の音を便に遣つて参りますると、遙か向方に一軒の立派な道場がござります門の所に大きな札が出て居る、見ると「花房流指南 花房主水」と書いて御座いますので。

武蔵は「ハ、花房流と云ふ流名は餘り是まで聞いた事は無い、何しろ立合を致して見やう」と、其のまゝ玄關へかゝりまして、取次を頼むと、稽古衣を着けた一人の門弟、其處へ取次に出ました。取次「ア、孰れからお出でになりました」

此の時武蔵は自分の本名を名乗らうと思つたが、若し本名を云ふと向ふが出来ない奴だと立合をしないかも知れない、これは一番偽名をして遣らうと考へ

ました、何しろ其の頃ひ武蔵の名前は已に天下に響いて居りまするから、技倆の出来ぬ奴は滅多に立合をする氣遣ひは無いからで御座います、それで武蔵は何と云ふ名前を名乗らうかと考へて居りますると、取次に出た門弟は、

「失禮ながらお姓名を承まはりましたうござります 武「オ、拙者の名前が、名前は大木松之助と申します」

門弟は妙な名前だと思つた、これは武蔵が傍らを見ると大きな松の木が一本ありましたから早速の頓智で大木松之助と名乗つたのでありますが、門弟はそんなことは知ませんから「暫らくお控へを願ひます」と道場へ参りまして、

門弟「先生へ申し上げます 主水「何だ 門弟「只今修行者が参りました

立合を願ひたいと申します、如何取斗ひませうや 主「フンくそんな奴だ強さうな奴か、又弱さうな奴か 門弟「左様でござります、ドウも餘り強さうな人物とも思はれません、第一名前が大木松之助と云ふ變手古の名前でござり

ます 主「フン妙な名前があるな、大木松之助と云ふ劍客者は聞いた事が無い、コレ、乃公の机の上に武藝者一覽表が置いてあるから夫れを持って來い」畏りました」

と門弟は早速取つて参りましたのを手にしました花房は目を通して調べてをります、尤も此の一覽表には有らゆる天下の名人の姓名が皆書いてある、第一に塚原卜傳、吉岡兼房、關口彌太郎、伊藤彌五郎、淺岡三五郎一心齋、柳生但馬守、柳生重兵衛三嚴、宮本武藏などと有らゆる武人の名前が載つて居ります、けれど大木松之助と云ふ其様な劍客者はござりません、其處で主は此の武藝一覽表に無いぐらゐの奴だから餘り上手の奴では無い、主「夫れちや一つ乃公が立合をするから案内をしろ」

卑怯の劍客もあるものでござります、で門弟は武藏を道場へ案内をする、此の折花房主水は

主「之れは、能うこそお尋ね下りました、拙者事は花房流を指南致す花房主水と申します、以後お見知り置かれて御心易く願ひます、武「之れは、御丁寧の御挨拶痛み入ります、拙者儀は大木松之助と申します、若年未熟の者でござります、何分ドゥカお手柔かに一本御立合を願ひます、主「して尊公の御流名は何と申しまするか、武「左様でござります、私のは流名も何にもござりません、勝手に學んだ劍術でござりますから流儀などはありません、此の時花房主水何うも武藏の様子を見ると年は若い、腕前は出來さうに思はれます、道が天下に名を現はした宮本武藏だから幾ら隠して居つても何處かに違ふところがあるものと見へます、主水は之れはナカ、油斷だ出來ないと思ひ乍ら「然らば立合を致します」と之れより兩人仕度をして夫れへ出ました、宮本は固より新免二刀流でござりますから、二振の木劍を取りました、けれど宮本は考へた、通常に附けると向ふが悟りはしないかと思ふから、態と二

本の木剣を丁度鼻の所へ出しました、
 これを見て花房主水 主「大木氏、其の構へは何と云ふ構へでござります
 武」然らば鼻の下に附けるのを鯨の鬚構へと申します 主「へ、へ、」妙な附け方
 もあればあるもの、すると今度は武蔵が木剣を頭の上に二本差上ります、花房
 主水いろ／＼の事をすると思つて 主「先生其の構へは 武」されば之れは牛
 の角構へと申します」
 主水は心の中に人を馬鹿にすると思ひながら構へて居る内に武蔵も氣合を入れ
 て前へ進みましたが固より新免二刀流の名入宮本武蔵には逆も花房なごの
 遠く及ぶ所ではござりませんが武蔵は進んでも打たず殊更ら調子を合して居り
 ますから暫らくはエイ、ヤツ……と双方氣合を掛けて居りますと、聊か氣の
 焦りました花房、武蔵の身体に隙があつたかボンと一本打ち込で行くを「心
 得たり」とあつて武蔵は二三合打合しましたが、其内花房主水が打込む木剣を

十字の構へと云ふので受止めました、此の折花房主水木剣を抜かうとしたが
 ナカ／＼此の十字を破る事は出来ません、
 之れは其の筈でござります、宮本の十字を破るものは今の所天下に二人しかな
 い、それは有馬喜兵衛光信と、關口彌太郎で御座います、して見ると花房如
 きは却々宮本の十字を容易に破れる筈のものではござりません、
 此の時主水は木剣を投げ捨て頭を下げ 主「塞に先生恐れ入ります、只今の
 御手腕實に感心を致しました、失禮ながら尊公は大木松之助とは假の御名前、
 若しや小倉の宮本先生ではござりませんか 武」之れは塞に恐れ入ります、
 實は仰せの通り宮本武蔵でござります、花房主水は 主「ソソならさうと先
 刻言つて呉れば立合をするのではなかつたか」と心の中に思つたのは無理は無い、
 ソコで主水は武蔵に向ひまして、
 主「先生とは知らずして塞に失禮を仕りましたドッか暫らく當道場へ御滞在

を願ひまする」
乃で武藏は主水の道場に一週間許も足を留めて居ります、或時の事武藏は主水に向つて、

武「花房氏、添上郡下榎木阪に柳生重兵衛先生お在のよし、折角是迄参つた事であるから重兵衛先生にお目通りを致し、未熟ながら一本立合を願ひたいと思ひますが、先方は將軍家御指南役の重兵衛先生、私は陪臣の事でござりますから御目通りの事も適ひますまいが、尊公は郡山にお在になりますから柳生先生を御存じてござりませうな、主左様でござります、私は折々重兵衛先生の所へ御目通りに参ります、先生貴所が榎木阪の重兵衛先生の御住所へお出でにならうと云ふのなら私御案内致しませう、私から願ひますれば重兵衛先生お立合下さるかも知れませんが」
武藏之れを聴いて大いに喜んで、宮夫はドウも幸ひのお手續き早速どうお掛

者御同道を願ひたい」と云ふので、ソコで主水武藏の兩人は郡山を出立して榎木阪の重兵衛先生のお住所へ遣ッて行きまして是れから柳生先生と眞劍の勝負を致すと云ふお話しに相なります。

○ 柳生流の極意八間飛切の術

何しろ一萬石の柳生重兵衛先生の御住所實に立派のものでござります、玄關へ來つて取次を頼むと年の頃は十五六才にならうと云ふ少年が取次に出て主水の顔を見て、

少「之れはく郡山の主水先生でござりますか、近頃は暫らくお出でがござりませんが、先生は時々貴所の事を仰有つて居られます、さうぞ此方へお上りを願ひます、主實は今日伺ひましたのは之にお在になりますのは豊前小倉の宮本先生でござります、今日柳生先生にお目通りを願ひたいと心得まし

て御同道を致しました、何卒先生へ宜しくお取次を願ひたうござります」テ右の少年は奥へ入ります、此の時武藏は主水に向ひ、

武「花房氏 主「ハ、ハ、ハ、武「只今の少年は名は何と申す 主「されば彼は伊勢の國は度會郡山田の郷荒木村の住人、先祖は荒木攝津守村重の後胤にして荒木丑之助と申します、先年重兵衛先生諸國御漫遊の時、奈良の法藏院に於て初めて門弟に遊ばしたものでござります」之れを聽いて武藏は、

武「成程何うも只今取次に出て、拙者の容子を見て居た眼は通常の者では無いと心得たが、實に末頼もしき所の少年である、鉢の備し、眼の配り、總ての動作普通の少年とは思はれぬ」すると少時経ちまして丑之助其處へ出て参りました、

丑「只今先生へ申し上げました處、折角のお訪れであるからお進し申せと被仰る、何うぞ此方へ御出を願ひます」

之れから兩人を庭先に案内を致しまする、

武藏来て見ると遠がは壹萬石のお屋敷、庭の正面には築山、左手は南天林、右手は寒竹林、唐銅の鶴、雪見燈籠、立派な御殿、三代將軍家光公から拜領をした富士見の御殿と云ふ、之れは有名のものでござります、柱は總檜にて、天井板は薩摩杉、床の間は黒柿、丸削りの床柱、床に懸てあるのは墨繪の達磨の軸でござります、

重兵衛先生は非常に禪學の好きな人、其の頃品川東海寺に澤庵和尚と云ふ有名な人がござりましたが此の人に就て禪學をお學びになりました程で立派なのは擊劍許りの學問も非常に出來たお方で、實に文武兩道の侍でござります、

尚亦御襖は狩野法眼元信の筆、信州川中島に於て永祿四年越後の國は頸城郡春日山の城主上杉輝正輝虎入道と、甲斐の國は西山梨郡甲

府の城主武田大膳太夫入道信玄と一騎打の圖が書いてあります、遺物は有名狩野法眼元信の筆、

爾人は御椽側の所に平伏をして居りますと、正面の御襖が左右に開かれ、廳で夫れへ御出ましになつたのが柳生公の御家來十數名續いて重兵衛先生御出座、三ツ葉葵御紋の附いた御刀に、仙臺平の御袴、黒縮緬にお家御紋の附きました御羽織、金造り凸み出、鏝の小鏡を前半に佩け、重兵衛先生の御背後には荒木丑之助御刀を持つて控へて居ります、

重兵衛先生は右の手に南蠻鐵の扇、此の鐵扇には金の象眼で表には「振り上げし太刀の下こそ地獄なり、身を捨てこそ浮ぶ瀬もあり」裏を返すと「天地日月、火水、木金、土、空」と書き記して御座います、之れは後に荒木にお譲りになりました世に有名な品でござります、

其他重兵衛先生のお側に控へて居りますのが家老柳生金太夫を首めとして、

二十人許りの門弟ズツと居並んで居ります、此時主水は重兵衛先生に對し、

主「恐れ乍ら久方振にお目通りを致します、例時ながら御機嫌の体を拜し恐悦に存じ奉ります、重兵衛先生「オ、其方は主水であるか、今日は能くこそ罷越した」其方今日同道を致したのは豫て噂に承はつた豊前小倉小笠原の藩で宮本武藏であるか、主「左様でござります、重「之はく武藏」

宮「ハッ、重「余は柳生重兵衛三嚴だ、見知り置け」と仰つしやつた、同じ侍だが遠がば壹萬石の重兵衛先生大した御見識でござります、此の折武藏は兩手を突いて、

宮「恐れながら申し上げます、拙者事は小笠原の藩宮本武藏正名にござります豫て先生の御高名は承知を致しました、お目通りを致しまするのは今日が初めて、して今日御目通りを願ひましたのは他ではござりません、何卒未熟ながら一本の御立合を願ひたうござります、重兵衛先生、重「折角ではあるが武

藏其の儀は罷り相成らぬ、柳生眞陰は天下の禁止流であるから萬一其方に流名を取られては將軍家へ對して恐れ多い、依て立合の儀は相成らぬ、武藏は驚いた、折角訪れて来たのに重兵衛先生は立合は出来ぬと云ふ、併し押して願うのも悪いと思つたから武藏は其儘黙つて控へて居ります、と重兵衛先生、

重之れく武藏強つて其方予と立合を致したければ眞劍の勝負なら致し遣はず木劍仕合の勝負は罷り相成らぬ、之れを聽いて武藏は驚いた、通常の勝負と違つて眞劍勝負と云ふ事は容易ならぬを、兩虎争ふ時は一人は傷き、一人は死するの慣ひ、萬一重兵衛先生の御身体に傷付くるやうな事が出来たならば大變の事である、又自分が重兵衛先生に斬られて了はゞ斯様な詰らぬ話はない、何方にした所で割に合はぬ話と、暫らく武藏考へて居ると重兵衛先生、

藏ドウぢや、眞劍勝負の儀は其方は不承知か、聞いて武藏は俄に度胸を据へ、宮に勝負は時の運、何は向ふが天下の名人でも立合つた上ならでは何方が勝つか分らぬ、同じ死ぬるなら斯う云ふ所で生命を捨てた方が自分の名譽になる」と思つたから、

宮「恐れながらお言葉に従ひまして眞劍勝負の立合を願ひまする」それで重兵衛先生は三代將軍家光公より拜領を致しました所の三池傳太光世の一刀、之れは天下に三刀と云つて有名のもの、其の一刀は旭將軍又の名は獨眼龍と呼ばれました仙臺の伊達の御家にござります、今一刀は眞西將軍と呼ばれた薩摩の島津家にござります、之れは重兵衛先生が四年の間九州を漫遊した時に三代將軍家から拜領を致した大功の御刀なり、後に之れを荒木又右衛門に御譲りになります、荒木は此の名刀を持つて伊賀の上野は金山寺門前鍛屋ヶ辻に於て三十六人の劍客を向ふへ廻して眞劍勝負に及ん

だのは有名のお話。さて武藏は十分に身仕度をして是つら双方庭前に於て真劍勝負と云ふ事になつた、これを見て驚きました花房主水。

主之れば大變の事になつたぞ、武藏が重兵衛先生を斬れば大變の事になる又宮本が重兵衛先生の爲に討たれば宮本に對して寔に氣の毒だ、併し今更止める譯にはいかず」と花房は大いに困つた内にも、如何相成る事だらうと手に汗を握つて双方を見て居ります。重兵衛先生は三池傳太光世の一刀を取つて片身外しの青眼にヒタリと御構へに相成る宮本は固より二刀流でござりますから、大刀と小刀を取つて天地の構へに附けました、双方暫らくヤツ……と云ふ氣合を掛けて居りますがナカナカ容易には何方も斬込で参りません、之れが通例の木劍で遣るとは違ひまして一つ間違ひますと生命を取られますから何方も大事を取つて双方隙を窺つ

て居ります、ゴツちも天下の名人と名人の仕合、居並んで居ります門弟の面々は皆一つ瞬きもせずに重兵衛先生と武藏の様子を見て居ります、此の折重兵衛先生は武藏の身体に隙があつたかヤツ……と云ふ氣合と共に斬込でお出でになります、武藏心得たりとあつて兩刀を以て受止める、是より双秘術を盡して斬結ぶ、一上一下虚々實々、或は龍となり、虎と叫び、實に其の勝負と云ふものは烈しい事でござります、稍々暫らくの間双方斬結んで居る内に武藏が右劍を取つて重兵衛先生にヤツ……と云ふて斬込で参ります、遠がの重兵衛先生も此の一刀を受ける事が出来なかつたと見へて、ヤツと云ふ氣合を入れると柳生流の極意八間飛切の術を以て後部の方へお飛に相成りました、武藏は確かに手答へがあつたから重兵衛先生を斬つたと思つて見ると傍らの杉の木に思はず斬込ました、武藏は大に驚いて何時の間にも重兵衛先生は此の場を遁れたらうかと向ふを見ると重兵衛先生は已に元のお坐敷に御立

歸りに相成ります。此折武藏はハツと驚いて後方に下り、
 宮寔に恐れ入つたる只今の御手の内寔に武藏恐れ入り奉ります。此折
 重兵衛先生は門弟にお向ひ遊ばし、重之れよ、一同「ハ、ハ、重宮本を召
 捕れと被仰つた、聲につれ多くの家來はバラ／＼と武藏の四方を取りまきま
 した。

〇己れ憎くい坊主め

柳生先生の意外な有様に武藏は大ひに驚き、武之れはしたり先生、何で私
 をお召捕に相成ります。重黙れ武藏、只今其方が打込たる太刀、予は迎も
 そのほうたち、其方の太刀を遁れる事が出来ぬと心得て八間後に飛び去つた、然るに其方
 も八間飛込んで参つたのは、全く予が流儀を悟つたに違ひない、依て天下の
 禁止流たる、柳生流の極意を其方に取りられた上は此儘其方を無事に還す事は

罷り相成らぬ」

之れを聞いて武藏は心中にハテなと思つた何も八間飛込ではいぬ、之れは重
 兵衛先生が極意を悟れと云ふ事だと考へたから、

武「恐れ乍ら申し上げます、然らば八間飛切の術は柳生流より外にはご
 ざりません、不肖ながら私、先年江戸表に滞在の折、小石川白山御殿、下に
 道場をお開きになり居られました石川軍刀齋先生に就いて修行を致しまし
 て已に先年、函根の山中に於て天下の豪傑、關口彌太郎先生と出逢ひ、其時關
 口先生より八間飛切の術を傳授されました、即ち私は八間飛切の
 術は疾より心得て居ります、敢て柳生流に限りませんでした譯ではござりません」
 之れは重兵衛先生一本参つた、そこで重兵衛先生は、

重「武藏、之れは全く予が心得違ひを致した、其方に左様な術あるとは知ら
 すして予が流名を悟りしと心得て其方を召捕れと申したのは予が誤りだ、武藏

許して呉れ」と被仰つた、で花房主水は双方が怪我をしないから「ア、宜ぬ搦梅だ、是れで安神を致す」と、大いに喜んで居る、是より重兵衛先生は武藏、主水をお坐敷に案内をして兩人に御酒を下さる、花房主水は「主私はこれにて御暇を致します、宮本先生、尊公はお緩りとお在を願ひます」と、主水は武藏を残して其儘郡山の道場へ立ち歸る、依て重兵衛先生は宮本を暫らく榎木阪の道場へ足を留めさしてお置きに相成ります、宮本は早く立ちたいか、重兵衛先生が歸れと云ふ事を言はぬ、勝手に出立をする譯には参りませんから乃で一日々々に日を暮して居ります、或る時の事重兵衛先生は武藏をお呼びに相成りまして、

重「武藏其方に對して予は頼みたい事がある、武「夫れは如何なる儀でありますか、重「外では無いが之れに居る荒木丑之助と申す者、近頃予が門弟にしたものであるが、彼れは將來有望の少年である、ドウカ其方の二刀流を丑之助に對して教へて呉れる譯には行くまいか、其代り其方に對して予が極意を譲る」と被仰つた、之れを聞いて武藏は、

武「委細承知を仕りました、然らば丑之助殿に二刀流を傳授致します」と、是れから武藏は荒木丑之助に新免二刀流を教へることゝなりました、總て物は覺へて居て損な事は無い、此の時に丑之助が宮本に二刀流を仕込まれて居たが爲に後に伊賀の上野で三十六人の劍客を相手にする時に一本の刀では間に合はないで二刀を以て相手を致したと云ふ夫れは後のお話でござりますが、其間に追々と丑之助が上達を致します、テ武藏は是れが爲に三箇月以上重兵衛先生の許に足を留めて居ります、或日重兵衛先生に對して、

武「私は之れにてお暇致したうござります、モウ丑之助殿も是丈のお技術になりますれば最早大丈夫でござります」重兵衛先生は「重「武藏長らくの間其方を留置いて定めし迷惑であつたらう、然らば其方に約束通り予が家に傳

其方に傳

はる五箇條の内、水月、奉書取、入身の此の三箇條を許すと、被仰つて武藏に重兵衛公三箇條をお許しに相成りました。

さて武藏は重兵衛先生にお暇を告げて、榎木阪の道場を出立致し、是れより奈良を見物しやうと有名の大佛に参詣を致しました、此の奈良の大佛は泰平の時人皇四十五代、聖武天皇の御世に御建立になつた日本第一の大佛様でございます、是より東大寺、興福寺、南圓堂から二月堂、三月堂と見物をして次ぎに、櫻の吉野に向はふと奈良を出立に及び、追々に南を指して春風に一人ブラリと道すがら、子安の地藏に参詣を致し丹波市から佐保ノ庄、成願寺、或は柳本、草川、芝、三輪の神社に参詣をし、三輪を出る前に竹田屋九兵衛と云ふ之れは梅川忠兵衛が遊んで有名の茶屋でございます、

此處で大和名物三輪素麺をも喰べ其の日は此家にお投宿に相成り、明くる日此家を立つて金屋、城ヶ島を通り越し西國は三十三番、其の八番の御札所長谷寺

へ参詣をし又もや下つて櫻井へ出て榎原の一の鳥屋を見物致し天狗石から飛鳥寺と所々を見物し、其の日は畝傍に一泊をしまして、神武天皇の御陵に参拜致し、夫より折れて段々と下市と云ふ所へかゝります、此處に名高い釣籠鮓と云ふのがある、之れは芝居に致しまする有名の鮓屋の彌助の家、此の釣籠鮓はドウ云ふ譯で名物になつて居るかと思ふに百里持つて行くと云へば夫れ丈の壇加減をする、十里持つて行くと云へば夫れ丈の壇加減をするので之れが大層の名物になつて居りますが、併し考へて見ると名物に旨いものなしと云ふて餘り名高い者に旨いものほござりません、

武藏は此の釣籠鮓を喰べながら休息をして居ると表から二人の百姓が入つて参りました、

○「之れは權作 權何だ ○汝は此間から疝氣で工合が悪いと言つて居たがドウした 權之れ茂作、聽いて呉れ、俺はな、ハア若い間から疝氣の爲

に酷い目にあつて是迄醫師にかゝつて随分薬も吞で見たがナカク薬ぐれえ
 ぢや治られえ、夫れで此の間或温泉が大いに効いたんだ、夫れは外でもれ
 え塩野葉の温泉よ、アノ温泉へ入つたんだが温泉と云ふものは又効くと怖いも
 の、永年醫者にかゝつて治らぬものが塩野葉の温泉に二週り入つて居る間に全
 然と疝氣が忘れたやうに治つて仕舞つた、茂「さういふ夫れはマア結構だ、夫れ
 ぢや俺も今度は疝氣が起つたら塩野葉の温泉へ行つて湯治をしやう」
 と、二人の百姓が傍らで話をして居るのを武藏が聞いて、之れは一つ鹽野葉の
 温泉と云ふへ行つて見やうか知らん、別に鉢の悪い所は無いが、旅の事なら人
 間は用心と云ふ事をして置かなければならぬ、鉢が悪くなつてからは後の祭で
 ある、兎に角一つ鹽野葉の温泉へ行つて暫らく湯治をして見やうと、是から此
 處を出て下市から真直に川の南側を通つて味代と云ふ在所を越して下山を越
 へ、三野村、佐和村を越えて芳野へ向ふのであるが、其の道を行くと鹽野葉の

温泉へ行くには都合が悪いからソコで洲原峠を越へ、以前の下淵村を越し
 て、檜垣本に出て、北六田から増口、蟹山を越え上市へ出まして茲に其の晩は
 一泊をして、是より轟村、芋山、淺山に參詣をして夫れより佛嶺を越し
 て大瀧と云ふ土地へ参りました、道が二筋に岐れて居る、右と左に道があるが
 何方の道へ行つて宜いか分りません、如何に劍術に名人の武藏も道の事は分
 らぬ、聽きたくも人家は遠しき武藏弱つて仕舞つた、テ右の方の道を行つた
 なら或は行けるかも知れぬと武藏右の方の道を取り、段々と遣つて参ります
 と追々と山の中へ入つて来る、さア武藏弱つた行く先き々に家はなし、其の
 内鉢は疲れて参りましたから傍らの岩に腰を架て思案を致しました、
 武「何しろ之れは困つた事が出来た、之れだけ来て人家が無いのだから事に
 依つたら道が違うのか知らぬ、大分歩いて来たやうだ」
 と、向ふを見ると遙かに見ゆるは大和富士、世にも名高き釋迦ヶ峯、大壺ヶ原

山、此方に見ゆるは行者山、稻村ヶ嶽、朝鮮岳には山上嶽、七面山、左手に大天井、小天井と云ふ二ツの山が見ゆる、實に武藏は海中の捨小舟如何せんと思ふ所へ「カンク」と云ふ鐘の聲が聞えます、すると年頃五十餘の旅僧、身の丈六尺有餘もあらうと云ふ大坊子黒鐵の錫杖を杖いて鐘を敲きながら今此方を指して遣つて参りますから「占た」と武藏は大いに喜んで旅僧に向ひ、

武「アイや御出家、實は拙者は鹽野葉の温泉へ参らうと思つて此處へ通りかゝつたが道に迷ふて誠に難儀を致して居る、鹽野葉の温泉は之れをドウ参つたら行かれますか」すると坊子 坊「夫れは御武家全然で道が違つて居ります、此の道は行者山に参る道で他へ行く道とは違う、鹽野葉の温泉は後へ三四里も歸らなければ行かれません 武「それはドウも意外だ事をした、右と左に道があつたから右の方へ來たが、して見れば左の方へ行けば鹽野葉の温泉へ行か

れたのか」

何して日は暮れて來るし、泊る所の宿屋はなし武藏は當惑をして居る様子旅僧武藏の様子を見て、

僧「お武家、定めてお困りでござりませう、此の邊には宿屋なんかと云ふものは一軒もござりませんから汚苦しけれ宜しければ今晚は私の寺へ泊て上げませう」

武藏之れを聞いて大いに喜んで 武「之れはドウも千萬忝けない、然らばドウか今夜は一泊させて頂きます 僧「夫れでは私が御案内致しますから御出でなさいまし」

と、是より十町許りを遣つて参りますと、向ふから二人の荒男が遣つて参ります此の坊子の顔を見て、
「若しお頭、大層お早うござりますな」

すると坊子が二人に何だか目配せを致します。
僧「ア、實はな途中まで来ると旅の御武家様に御目に懸つて今夜は寺へ泊て呉と被仰つたから御武家様を御同道して来た、貴様達は先へ行つて風呂の仕度でもして置け、今此のお方をお連れ申すから」

此の時武藏は「此奴は普通の坊子ぢやない、今二人の奴等が此の坊子をお頭と言つたが、ハ、ハ、ハ、して見れば此奴姿は坊子だが山賊に違ひない、憎き所の坊子」と、思つたが、併し此方は天下の豪傑宮本武藏警ひ山賊の廿人三十人出たからと云つて驚くやうな人ではござりませんから、早速武藏は坊子に向ひ

武「御出家 僧「ハ、ハ、ハ、武「今二人のものがお頭と云つたが一体之れはドウ云ふ譯だ」すると坊子は 僧「左様でござります、夫れは必ず御不審でござりませうが、此の邊の習慣でござりまして自分が目の上の人を見ると何でも構はぬお頭、お頭と云ふのが此の土地の習ひでござります、随つて私の事をお

頭と申したので別に不都合のものではござりません」

兩人は話をしながら又復五六町も遣つて来ると此は如何に遙か向うには廿人許の山賊体のものが各自長い利器を打込で此方を見て居ります、此の折武藏はさては山賊に違ひないと思つて見て居ると坊子は武藏に向つて、

坊「オイ侍、實は乃公は此の山に山養を樂いて居る夜又五郎頼念と云ふ山賊だ、汝が懷ろに持つて居る金は固より衣類大小とも根こそぎ貰うから覺悟をしろ」

之れを聞いた武藏「オ、顔相と云ひ言葉使ひと云ひ、ドウも通常の坊子ぢや無いと思つたが案の餘山賊であつたな、我こそは豊前小倉、小笠原の家臣にして宮本武藏正名と云ふもの、良民を苦しむる山賊ども許しはせぬぞ」と鐵扇を取つて大勢の山賊を相手にすると云ふお話を

〇癪に惱んでをる婦人

さて武藏は鐵扇を以て「さア來い」と一同を相手に致します、忽ちにして武藏は五六人の山賊を鐵扇を以て打ち掃へました、其の手の内遣は神免二刀流の名人實に清らかなものでござります、最前から瞞きもせず頼念坊武藏の立合に目を着けて居ましたが何思ひけん一刀を大地に投げ捨て武藏の前に兩手を突き、

頼念に先生恐れ入りました、只今御手の内を拜見致しましたが、天晴れ天下の大豪傑、何とも以て先生に御手向ひ致しましたる段は、申譯次第もござりません、實は先生の御技倆を試さんが爲に乾分の者に吩咐て失禮を致しました、就いては私は折入つて先生に一つ御願致したいことがござります、何が何と御聽取下さりませうか」

此の折武藏は油斷をさして置いて又如何なる事をするかも知れぬと思ひます、大に注意を致し、

武「フ、ーン、して拙者へ對して頼みと云ふは何事であるか」

是より此の夜及五郎頼念と云ふ坊子は自分の履歴を武藏に話を致します、抑も此の夜及五郎頼念と云ふ坊子は生れは大和ノ國吉野郡泥川村でござります、泥川村の林葉寺と云ふ寺の住職を麟念と申しまして、此の麟念と云ふ坊子が泥川村にさよと云ふ婦人がござりまして此のさよに大層惚れまして之れは幾ら坊子でも色情の道と云ふものは誰しも同じ事、そこで終に或人を以てドリカ女房に貰ひたいと云ふので漸く此のさよを妻に致しました、然るに間も無く因果の胤を宿したのが此の夜及五郎頼念、ところで七つ八つ位から寒に手癖が悪うござりまして、此の賊心のあるものは如何に親が教育をしても所謂持つて生れた性來と云ふものは致し方のないもので、追々と成長をする

に從つて段々と悪い事を致します、テ終に十五才の折頼念は此の寺を飛び出して行衛知れずに相成りました、

父の麟念は大に心配をして尋ねましたが何處へ参りましたか薩張り分りません、然るに頼念は寺を飛び出して所々方々を歩いて居る内に終に海賊となりまして九州灘に船を浮べ、西國の夜叉五郎とまで言はれ大勢の乾兒が出来まして勢ひを大に振つて居ります、すると追々年を取るに随つて氣力も衰へて参ります、依て茲に頼念は一寸改心を致します、

「ア、我れ乍ら意外な事をした、出家沙門の身として、是迄人の物を取り、或は人を殺し實に宜しからぬ事をしたが、寔に之れは濟まぬ事をした、モウ乃公は泥棒は止めやう」と遺がは元が僧侶の伴でござりますから、心を變へまして是より大和ノ國吉野郡泥川村林葉寺へ立ち歸つて参ります、テ父に逢はうとすると最早麟念は死して仕舞ました、そこで益々前非を後悔して一

度父の義弟と云ふのが同郡高原村の蓮正寺の住職になつて居りますから其處へ尋ねて参り、再び出家となり名前を頼念と名乗まして、道徳堅固に身を守つて居る内に叔父は終に死了いたしました、依て頼念は二代目蓮正寺の住職と云ふ事になりました、

すると或時の事頼念が村に托鉢に廻つて居りますと、頼念の後から

○「若しく其處へ行くのは頭ではござりませんか」

頼念はビックリして後ろを振り返つて見ると元と自分が賊を働いて居つた時分に乾兒にして居つた筑紫の仙太と云ふ男であります、

頼「ヤア貴様は筑紫の仙太ぢやないか 仙「ドウもお頭暫らくお目に懸りません、何でお前さんは坊子にお成になりました 頼「仙太聽いて呉れ、俺も今まで小兒の間から手癖が悪くつて悪い事をして居たが、マア追々俺も取る年だ、依て乃公は改心をして斯う云ふ坊子になつたのだ、人間と云ふものは老少

不定何日何ぞきドウ云ふ事があるが分らぬ、貴様も足許の明るい内にモウ盗賊を止めてドウか眞人間になつて呉れ」
すると仙太は、

仙頭「何でお前さんはソンの氣にお成りになりやした、今まで人殺しをしたり、人の物を取つたものが今更改心をしたからと云つて、是迄なしたる罪は決して消へて了ひはしません、長い浮世に短かい生命、世の中は面白く暮すのが一生の徳ぢやアござりませんか、お前さんが泥棒を止めたから近頃は龍海五郎と云ふ海賊に持ち場を取られて了つて、乃で私ほ仕方がれエからお前さんを探して居たんです、ドウか頭ソンの事を言はれエで改心をして以前の泥棒になつて下せえまし」
改心をして泥棒になる奴は無いものでげす、
テ頼念は大体が心の曲つた奴だから筑紫の仙太に勧められて、

頼「夫れぢやモウ一遍遣つて見やうか」と云ふ考へを起しました、ドウも一旦悪事に染つた奴はナカ／＼容易に改心の出来ぬものと見へます、
そこで是から蓮正寺に多くの乾兒を集め又泥棒を始めました、けれども大體坊子上りの頼念でござりますから決して非義、非道の事は致しません、大家へ入つては金を取り、困る者は助けると云ふ泥棒仲間では之れを義賊、仁賊と申します、能く吾々同業者が泥棒を捉えて義賊とか仁賊とか申しますが、之れは決して吾々が褒める名稱ではござりません、泥棒仲間云ふ名稱でござります、人の物を取つて義賊、仁賊と云ふやうなソンの馬鹿な話ばござりません、ソコで或日の事頼念は手下三三人を連れまして蓮正寺を出まして、下淵村と云ふ所へかゝつて來ました、すると年頃三十格好の婦人が道の傍に倒れ癪でも起して居りますか非常に苦んで居ります、一人の乾分は之れを見て
×「若しく頭 頼」何だ ×「何だか知れねえが女が 苦んで居ります」

云ふ聲に頼念来て見ると餘程烈しい癩と見へまして女はウン／＼と唸つて居る
頼念は可愛さうだと思つて手下に吩咐て蓮正寺へ此の女を連れて参りましたが
そも／＼此女は何者で御座いませう。

〇モシ大變が出来ました

さて頼念は連れてまいりました婦人を種々介抱をしましたが漸く癩は治
りました。他の病氣と違つて此の癩と云ふものは起つた時には今にも死ぬかと
思ふやうですが治まると亦た嘘を吐いたやうに治る病でござります、ドウして
も男と違つて女は氣が小さいものと見へまして、嬉しいにつけ、悲しいに着け
癩を起します、テ頼念は此の女に事情を尋ねて見ると此の女は出羽ノ國最上
の城主最上出羽守の家老で三萬五千石を取つて居た阪崎甲斐守の妾、名前
が青柳と云ふ、今一人で諸國を廻つて居ると云ふのは此の最上出羽守と云ふ人

は藝州廣島の城主福島左衛門大夫正則と共謀をして豊臣の家を再興せん
と、徳川將軍を暗殺しやうと謀つた、然るに最上出羽守は偶とした所から江
戸吉原の山野屋治郎左衛門の抱へで業名を浦里と云ふ太夫に現つて援けし、之
れを芝居すると浦里時次郎と云ふ、勿論芝居と講演とは大に違ひます、
所で此の浦里と云ふものは二世を交した情夫がござります、江戸の旗本春
日時次郎と云ふ、此の男があるから最上出羽守の言ふ事を諾きません、色情の
道は妙なもので向ふが薄情くすると餘計此方は逆せるやうな譯で、イロ／＼に
遣つて見たがドウしても浦里は心に従ひません、で最出羽守は寧ろ身受をし
やうと云ふので厭がる浦里を身受をして國許へ連れて参り、種々説諭をし
ましたがドウしても心に従ひません、其處で終には雪の降る晩に裸にして庭の
松の木に縛付たりイロ／＼責め折檻をしましたが、女と云ふものは一つ決心
なすると男と違ひましてナカ／＼殺されても云ふ事を聞きません。

然るに其事を情夫たる春日時次郎が聞き込み、最上出羽守は逆心があるに依つて何うか夫の爲に一時出羽守に身を任せ其の證據を發見をして呉れる」と男より浦里の所へ報知を致します、そこで浦里は情夫の爲ならばと漸く心を離へし最上出羽守の心に從ひ遂々確かなる證據を見出しまして情夫時次郎の許へ此の事を知らせましたから、春日時次郎より將軍家へ進達をする、徳川將軍よりは大勢の人勢を最上出羽守を攻めました、何しろ徳川幕府の勢ひであるから忽ちにして最上出羽守は討死となり、終に最上家は斷絶と云ふ事に成りました、此の時に家老 阪崎甲斐守は主家の爲に必死の働きをして終に討死を致します、然るに阪崎の妾 青柳は其の時に甲斐守の胤を宿して居りましたから城下を忍んで出て、主君の菩提の爲に西國三十三箇所を廻り此の吉野郡へ参りましたと一伍一什を話す、

其處で頼念は此の話を聞いて寔に怒然に思ひまして終に蓮正寺に置いて種々世話をして居る内に生れ落ちたが男の子、名前を源太郎と命けました、これが最上出羽守の家老 阪崎甲斐守の遺れ兒でござります、然るに此の源太郎道々成長をするに従つて寔に懶口でござります、又子供ながらに力量があるし悪戯ではあるがナカク賢い、して見ると胤と云ふものは長くないと不可ません、所で此の源太郎が八才の時に母の青柳は偶とした風邪の心地で重き枕の床にきま着した、頼念はドウがして病氣を治して遣りたいと種々に心配をしましたがドウしても全快を致しません、青柳は死生の刹那に頼念を枕許に呼び、

青寔に是れ迄長らく母子のものが御厄介になりました、有難うござります併し乍ら私は、モウ之れでお暇を致します、就ては死生の刹那に心にかゝりますのは伴の源太郎でござります、何うぞ私が死にました後は源太郎を養育

をして阪崎の家名を立てさせて下さいまし」と、
 吳々も頼念に遺言をして終に青柳は冥土黄泉へ歸らぬ旅立をしました。然るに源太郎十二三才になりますと毎晩々々何處へ行くか寺には居りません、頼念も心配をしたマダ子供の事であるから別に女を拵へた譯でもあるまいし、又此の邊には女郎屋はなし、一体何處へ行くだらうと頼念は不思議に思つて居ります、
 其中に月日に關守なく、光陰矢の如く源太郎今歳十八才の春を迎ふる事に成りました、テ源太郎何者から武藝を教はりましたか、腕前はナカク大したもので、殊に子供の中から力もござりましたから誰も源太郎に及ぶものはござりません、併し此の源太郎は恐ろしい剛慢の男で世の中に乃公程強いものは無いと云ふて常時慢心をして居ります、依て頼念はドウかして天下の名人に出逢ひまして源太郎の武藝の自慢を懲し、母の青柳の頼みを立てドウか阪崎家の家名

を相續させたいと、乃で毎日里へ出ましては天下の豪傑を探して居ります、然るに測らず武藏に出逢ひましたから頼念は大に喜び、此の先生に頼んで源太郎の自慢を治し、且つ武藝を仕込で貰うと云ふ考へ乃で只今申上た通り乾兒の者に言ひ附け武藏の立合を試して見た所が遠がは天下の大豪傑、實に大した腕前でござります、夫れ故頼念は武藏に向つて以上の逐一を物語り、頼「只今申上た通りの次第、決して貴所の金を取らうの、貴所を殺さうのと云ふ考へではござりません、唯だ伴源太郎の事を貴所に御願ひ申さうと思つて實に貴所に失禮を致しました、寔に先生恐れ入ります、ドウか私の寺へお出で下さいまして源太郎の慢心を治し且つは武藝を仕込で頂きたうござります」
 武藏は之れを聽いて、
 武「委細承知を致した、夫れでは乃公が一つ源太郎とやらの剛慢を治して遣

らう總て人間は慢心をするのは大に宜しくない、夫れでは同道をしやう一と云ふので是より頼念は武藏を同道して蓮正寺へ遣つて参ります、ナカく立派の寺でござります、

頼「さア、まア先生此方へ」と云ふので武藏を奥座敷に案内を致します、其中に何處から持つて参りましたか、山家には珍らしい酒、肴、大した御馳走か出ます、

けれど武藏は油断をしない、相手が山賊だからドンな事から油断をさせて置いて又如何なる計略を施すかも知れぬと思ふから容易に酒も呑まない、頼念は此の動靜を見て取つて、

頼「先生、決して私には先刻申し上げた通り貴所を殺すやうな氣遣ひはござりません、定めし貴所は御疑ひがござりませうが私がお滋味を致しますから召上り下さりますやうに」

と、乃で頼念は酒を呑み肴も喰べ武藏の安心をするやうに致しましたから、武藏も大に安神をして御馳走になります、テ武藏は頼念に向ひ、

武「頼念、一体其の源太郎と云ふは何處に居るか、頼「左様でござります、近頃では私が餘り喧しく小言を申しますものだから此の寺には居りません、山奥に隠居をして居ります、武「コレく鹿馬な事を言へ、十七や十八で隠居

をする奴があるものか、頼「ところがさうではござりません、私が小言を云ふのを蒼蠅がつて蒲谷と云ふ所へ家を一軒立てまして一人で其處に居ります、只今乾兒の者を迎ひに遣ります、ドウい先生暫らくお待ちを願ひます」と頼念は乾兒を呼んで、

頼「コレく貴様御苦勞だかな、是から蒲谷の源太郎の所へ行つて通常の事では来ないから、之れく斯う云つて源太郎を引張て来い、〇「長りまして是より乾兒は蒲谷の源太郎の所へ参ります、

○「若しく、源太郎さんお在でござりますか」源「オ、竹か、何しに來た竹」ハア大變が出来ました 源「どうした 竹」實は今蓮正寺へ若い立派の侍が遣つて参りました、其の人が大變の豪傑なんで頭を首め乾兒の者が二十三人其の豪傑の爲に斬り立られ、今お父さんが其の侍を相手に斬結んで居りますが迎も阿父さんは敵ひますまい、愚圖々々して居れば阿父さんは殺されて了ひます、了こで貴所に來て助けて貰ひたいと思つて遣つて來ました」固より慢心増長をして居る源太郎之れを聽いて、

源「ヤア貴様達は意氣地の無い奴だ、たつた一人の侍に皆遣られると云ふは情けない奴等だ、終し乃公が行つて一番其の侍の首を引抜いて遣る」固より大膽不敵の源太郎乾兒の者を連れまして蓮正寺へ遣つてまいりました。

○此奴は丸で化物

源太郎來て見ると別に何事も無いやうですからハテなと思ひ乍ら父の頼念の部屋へ通つて見ると頼念は蒲團の上に坐つて前には酒肴を置いて酒を呑で居る此の有様を見て源太郎、

源「ア、阿父さん、今竹の野郎が來て此の寺へ豪傑を乗込で來て、大勢のものゝを相手にし今貴所と真劍の勝負をして居るから直に來て呉れと云ふのでチヨツと貴所を助けに來たんです、一体之れはドウした譯です」之れを聽いて頼念は、

頼「コレく源太郎、實はさう言はぬと貴様は出て來ないから謀略を以て貴様を呼び寄せたのだ、實は此の寺に御投宿致された天下の豪傑がある、豫て其方も名前は聞いて居るだらうが豊前小倉、小笠原の臣宮本武藏先生と云

ふ天下の豪傑だ、で宮本先生に頼ひ貴様の慢心を治し、且つ劍術を教へて頂きたいと思つてワザ／＼此處へ阿父さんが御案内申して来た、豫てお前にも話した通りお前は私の爲に眞實の子ぢやない、お前は筋目正しき豊臣の臣、最上出羽守の一家老三萬五千石阪崎甲斐守の遺兒、依てお前は之れから腕前を研ぎ阪崎の家名を立てなければならぬ身の上、今乃公が武藏先生の所へお前を連れて行つて先生にお頼ひ申すから、是から慢心を直して先生に就て修業をするが宜い、

すると源太郎は、

源「阿父さん申戯言つちや行けません、世の中に私ぐらゐ強いものは恐らくござりますまい、夫れば成程宮本武藏と云ふ人は二刀流の名人と云ふ事も承知をして居りますが、なアに私の目から見れば子供も同様です、新ものゝ弟子になるやうな源太郎とは違ひます、併し折角阿父さんが連れて來たんです

から、私「が今立合をして美事宮本を打込で御覽に入れます」
と、飽くまでも大膽不敵の源太郎に頼念も呆れ返つて、ソコで頼念は源太郎を連れて武藏の部屋に遣つて参ります、

頼「さて先生、貴所に御頼ひ致しました件源太郎は之れでござります、何卒致して源太郎にドウゾ一本の御教導を頼ひたうござります、之れ／＼源太郎先生へ對して御挨拶をしないか、
源太郎「癪に障るけれども仕方ない親爺の言ふ事だから據らなく武藏の前へ兩手を突いて、

源「之れは／＼貴所が有名の武藏先生に在らつしやいますか、私「は頼念の件阪崎源太郎と申します、天下無双の豪傑でござります、何卒御見知り置かれて心易く……」
武藏は心中に呆れた、

武成程頼念の云ふ通り餘程慢心を致して居る、自分の事を天下無双の豪傑と云ふ奴も無いものだ、可し今一本仕合をして小酷い目に逢はして遣ると心中に思ひ乍ら武藏は、

武「フン、其方は頼念の伴源太郎と申すか、拙者は宮本武藏正名である、併し其方は大分腕前が出来ると云ふ事を承知をして、幸ひ武藏一本立合をして遣るから仕度を致せ、就ては源太郎其方に斷はつて置くがな武藏の木劍は真劍に等しいから一ツ彷彿くと其方の生命が無いから其積りで立合をしる源太郎之れを聽いて、

源「不埒の事を云ふ奴だ、高の知れた武藏の木劍何程の事があらう」と思ひ乍ら豫て準備の木劍を取つて、

源「夫れぢやア先生御相手を致します」と、是より兩人庭に出まして武藏は二本の木劍を取つて片太刀に構へます、

無論武藏の木劍は真劍に等しい、總て名人は真劍を用ゐませんでも譬ひ木劍一本でも場合に依れば人を殺すと云ふやうな事が幾らもござります、那將莫耶の木劍と雖も持人が悪ければ役に立ちません、此の折源太郎が持つて出でたる木劍は二尺一寸ござります、赤檜の木劍を取つて青眼に構へまして双方エー、ヤと云ふ氣合を入れます、此の途端武藏、源太郎の腕前を見て、

武「成程之れは年の割合には餘程腕前が出来る哩、何者から教はつたか知らぬが、之れは慢心をするのも無理は無い、實にドウも不思議の奴だ」と思つて居ります、此方は源太郎木劍を取つて武藏の構へを見て驚いた、

源「成程道がは神免二刀流の名人、武藏と云ふ奴は大した腕前だ」と、初めて武藏の技術を見て感心致します、互に隙を窺つて打込うと思つて暫らくの間は双方動靜を窺つて居りましたが、ナカ／＼何方も隙がござりません、然るに即て武藏の身体に隙があつたか源太郎木劍を取つて真向から致

してエーと云ふて打込で参つたのを武藏「心得たり」とあつて二振の木劍を取つてポンく、ポンと暫らくの間、双方秘術を盡して打ち合ます、片方は一本の兇器、武藏は二本でござりますから武藏の打込む木劍の疾いの疾くないのではござりません、右劍を受けて居る内に左劍が飛で来る、左劍を受けて居る間に右劍が飛で来る、右劍が来るかと思ふと左劍、左劍が来るかと思ふと右劍が来る、盆が来れば暮が来る、夫れは餘計の事でござりますが稍々暫らくの間、双方立合つて居る間に武藏が右劍を取つて源太郎の眞向よりエーツと云つて打込むと云ふと遠がの源太郎は逆も此の武藏の木劍を受くる事は出来ぬと思つたか、ヤッ……と云ふ矢聲諸共後邊の方へ三間許り飛び去つて突然手を以てエーと許りに天地を打つと不思議なる哉黒雲舞下つて参る、源太郎此の黒雲に乗つて孰れかへ姿を隠して了ひました、武藏は之れを見て呆れた、

武「何だ此奴は丸で化物だ、不思議の奴もあればあるものだ、敵はぬやうに

なつたら雲に乗つて逃げる」

實に人間業とは思はれんから武藏は頼念に向ひ、

武「頼念、頼ハ、一、武實に源太郎と云ふ奴は不思議の奴だ、黒雲に乗つて何れかへ姿を隠した、一体アレはドウした譯だ、頼」左様でござります、誰からアんな事を教はつたか、私には分りません、時々ア、云ふ事を致します、實にドウも不思議の奴でござります、だが先生之れに御懲なく、何分ドウか源太郎の慢心を治して下さい、先刻來の無禮重々御詫は私より致します、

武「武藏は源太郎が何處かへ行つて了つたので仕方がない、其の夜は武藏寝る事になつて丁度彼は八ツ頃ひの刻限に武藏宜い、心持に寝て居ると、何となしに襟元より水を掛けられたやうに鉢が慄とします、ハツと思ふて武藏目を開いて見ると、枕許に行燈が點いて居る、さうして行燈の脇に何々怪しいものが居る様子、武藏能く々々見ると年の頃ひ三十才以上にも相成らうと云ふ一人の女、

緑艶なす黒髪を振り素し、顔の色は蒼白で武藏の枕許に兩手を支へてお辭
義をして居る武藏驚いた、意外だ所へ泊つたと思つて、乃で武藏女に向ひ、
武「其方は何奴である、我が居間に對して何やうあつて罷越した、一体其方
は何だ」

すると女は兩眼よりバラ／＼と涙を溢し、

女「寔に先生お休みの所へ出まして申譯ござりません、何を隠しませう、
私は最上出羽守の家老阪崎甲斐守の妾青柳と申します、御承知の通り主
家斷絶に及び此の折夫甲斐守は討死を致し、私は懷妊の体にして主家の菩
提を吊げん爲に西國三十三箇所を廻り、測らずも大和へ來り當寺の住職頼念
法師のお世話になり身二つとなり其儘御厄介になり居ります、然る所伴
源太郎子供の辭に我力量に慢じ人を人とも思はぬ振舞ゆへ深く彼の身を案じ
居りました處貴所様の御越し、夫れ故失禮ながら源太郎の身の上につき御

頼み申しに參りました、彼れには源九郎狐と云ふ白狐が附いて居ります、
風を起し、雲を呼びナカ／＼人間の及ばぬ事を心得て居ります、夫れで今日は
貴所へ對し寔に濟まぬ事を仕りました、ドウか此上ともに伴の慢心をお直
し下さいまするやうに」

と、武藏に源太郎の事を頼みます、武藏之れを聽いて、

武「然らば其方は源太郎の母親であるか委細承知をした、必ず乃公が源太郎
の慢心を治して遣るから安神を致して成佛を致せよ」

すると青柳の姿は振き消す如くに消へて了ひました、武藏は心中に、

武「ア、親と云ふものは實に有難いものだ、焼野の雉子、夜の鶴、子を思は
ぬ親は無し冥土へ參つても伴の事を心配すると云ふのは親子の情と云ふものは
又格別なものだ」

と、大に感心をして武藏は再び枕に附いて今寢ようとするときシリ／＼と

云ふ人の足音がする、

武蔵ハ、亦た幽霊が遣つて来たかな、併し幽霊には足が無いと云ふから之れは幽霊では無い、何者が忍んで来たに違ひない」

と、武蔵は寝た振をして様子を窺つて居ると、武蔵の坐敷を指して忍んで参つたのは阪崎源太郎、最前武蔵の爲に敗れを取り、大体が慢心増長をして居る奴です、から残念で耐りません、そこで武蔵の寢息を窺ひ武蔵を一刀の下に斬つて遣らうと云ふ了見で障子の外へ参りまして坐敷の様子を窺つて居ると、此方は武蔵態と眠た振をしてグー／＼と鳴を聞いて居る、其様を窺つた源太郎、物と障子を明け武蔵の枕許に忍んで参ります、腰に佩したる一刀の鞘を拂ひ已に武蔵の寢首を斬らんと致します、此の結末は如何に一寸一服……。

〇流石の武蔵も驚いた

さて源太郎は武蔵の坐敷へ忍び込み、一刀の鞘を拂つて今已に武蔵の寢首を掻かうと致しました時に此方は武蔵寝た振をして居たのですからヤッ……と云ふと突然飛び起きました、

武蔵「汝れ源太郎不埒の奴、卑怯にも寢首を打たんとするのは甚だ以て不埒の奴、最早此の上は其方の生命武蔵が貰つた左様心得ろ」

と、枕許に在つた一刀を取つて源太郎に斬込ました稍々暫らくの間は烈しく斬結んで居る、

此の物音に父の頼念は目を覺すと武蔵の坐敷で眞剣の音が致しますから何事であらうと承塵に懸けてあつた二間の大身の槍を取つて武蔵の部屋へ来て見ると此は如何に一方は武蔵一方は伴源太郎、双方烈しく斬結んで居りまするか

ら、頼念源太郎に向ひ、

頼「コラゴうも其方は怪しからぬ奴だ、宮本先生に對して何で手向ひを致す、最早此上は其方を助けて置く譯にはいかぬ」

と、之れば武藏に對して頼念坊捨て置く譯には参りません、槍を抜いて源太郎に突いてかゝります、源太郎二人を敵にしては到底敵ひませんから一刀を提げて逃げ出しましたのを「汝れッ」と言つて武藏はアトからドン／＼追駈て参りました、

何しろ山の中で非常に道が悪い、源太郎の方は慣れて居りますから丸で平地を走る如くトットと駈けて行く、武藏はナカ／＼思ふやうに道が悪いから駈けられませんが、其中に遂々源太郎の姿を見失つて了ひます、武藏は大に残念に思ひまして、

武「實にドウも怪しからぬ奴だ、併しナカ／＼腕前は適れの奴だ、乃公が今

夜油断をして居つたなら業已の事に源太郎に遣られる所だつた、危ない、危ない

そこで武藏は寒さの時分の事でもあるし、体が追々と冷えて来る、蓮正寺へ歸らうと思ひましたが夢中になつて源太郎を追ひ駈けて参りましたから来た道が分かりません、仕方が無いから今夜は此處で夜を明して行かうと、幸ひ向ふに洞穴がござりますから此の穴の中に入りまして身の中が冷るから木の葉、枯れ松葉などを集め、夫れへ火を點けて焚火を致します、其中に追々体が暖かになつて参りましたから、

武「ア、宜い揃梅此處で今夜は夜を明して歸らう」と思つて居ると妙なもので寒い所へ急に体が暖かくなつて來ましたから思はず知らず武藏は睡眠を催ふすと、今前に燃へて居りました火がバラ／＼と消へて了ひます、ハッ……と思つて目を開いて見ると前に誰か兩手を突いて居るものがある、武藏が見る

と之れなん源太郎の母青柳でござります、

武「之れ其方は青柳では無いか、青寔に先生恐れ入りました、今日源太郎が先生へ對して寔に無禮を仕りまして實に私先生へ申譯がござりません、定めし憎い奴と思召でござりませうが、ドウぞお見捨なく源太郎に御意見の程を願ひたうござります、夫れが私氣に成りまして成佛を致す事が出来ません」

此處で武藏は、武「決して其儀は心配致すな、固より源太郎如何なる無禮を致すとも決して苦うない、飽く迄も彼れの剛慢を取挫いで呉るから心配をするには及ばぬ」

テ青柳の幽霊は其儘姿が消へて了ひます、所で遙か向ふの方から槍を小脇に抱へて遣つて参りました源太郎、武藏に向ひ、

源「アイヤ宮本の先生、最前は貴所の爲に敗を取り返すべくも残念でござり

ます、さアモウ一遍今度は槍を以てお相手を致します」
と、突然武藏を槍で突きかけました。

武「最前の手並に懲もせず又もや拙者に對し無禮をするか」

と、武藏は突然穴の中から飛び出して又もや武藏源太郎を相手に暫らくの間斬結んで居ります、源太郎が突き出す槍を武藏はヤツと云ふ氣合もろ共に千段巻の邊から斬落しました槍を斬られて源太郎アツと云つて驚いたが尙も屈せず源「先生此上は組打で参ります」と、大手を廣げて武藏へ組付いて参りました。

武「汝れ、猪小才な」と、武藏は一刀を投げ捨て是から源太郎と組打を始めました、ナカク此の源太郎と云ふ奴は年は若い力に飽くまで強うござります、力ぢや武藏、源太郎に敵ひません、暫らくの間双方上になり、下に成り組打をして居る内に遙かの谷間に組だ儘二人轉がり落ちました。

話頭一轉、此方は夜及五郎頼念、源太郎の跡を追駈て武藏が参りましたか
ら若し先生に御怪我でもあつてはならぬと云ふので大勢の乾兒を連れて武藏を
探しに参りました。そこで彼方此方探して見たが源太郎、武藏は見へません、
殊に依つたら谷間へでも落ちはせぬかとは是から一同は谷へ下りて参ります、す
ると遙か向ふの所で武藏と源太郎と組んだ儘落ちましたか幸ひ二人とも怪我を
致しません、武藏はやうく源太郎を取つて抑へまして、

武「さア源太郎モウ致し方は無い、斯うなれば此方のものだ、是より武藏其
方の首を引こ抜て遣るから左様心得ろ」

遠がの源太郎も之れには驚いた、モウ組み敷かれて居るからドウする事も出来
ませんそこで武藏は源太郎に向ひまして、

武「さア源太郎、是より改心を致して乃公の門弟になるか、夫れとも貴様が
飽く迄剛情を言ひ張り改心をしなければ其方の生命を取るがドウだ」

すると源太郎、

源「アイや先生、私に決して改心は致しません、殺すなら何時でも殺して
下さい、私は生命を取られても、殺されても決して降参は致しません、

剛情の奴もあればあるものでござります、テ武藏は仕方が無いから、
武「貴様のやうな剛情の奴に邂逅した事は無い、然らば今乃公が折檻を加へ
て遣る」

と、拳を堅めて源太郎を打たんとした、所へ背ろの方からワアツ……と云ふ
聲がしたから武藏は何事であらうと背後を振り返る途端、手が緩んだものか下か

ら源太郎ヤツ……と云ふて蹴れ起きた、之れはと思ふ中に源太郎ヤツ……
と云ふて大地を叩きますると黒雲が下つて参ります此の雲へ乗つて又復源太
郎、孰れへか姿を隠して了つた、之れには武藏驚いた、

武「アんな化物見たやうなものに邂逅した事が無い、是では意見をしたくも

「ドウする事も出来ない」
所へ頼念遣つて参りまして、

頼「ドウも先生寔に申譯がござりません、何と云ふ剛情な奴でござりませう、我伴ではござりますが實に彼奴には愛想もこそ盡き果ました、兎に角先生、寺へお歸り下さいまし」

と、是より頼念、武藏を連れて蓮正寺へ立ち歸つて参りました、そこで武藏は頼念に向ひ、

武「頼念、折角乃公も源太郎の事を頼まれたがア、云ふ工合では迎も拙者には意見が出来ない、敵はなくなると思つて逃げて逃げると云ふ、さう云ふ鹽梅では迎も意見の仕ようがない、拙者は折角だが明日は出立をするから」
頼念はモウさうも武藏に頼みやうもござりませんから、
頼寔にドウも先生済みません、最早此上は先生をお引止め申した所で致し

方もござりませんから、ドウぞ御勝手に御出立を願ひます」
それで武藏其晩は蓮正寺へ一泊致し、翌朝に成りますと頼念に暇乞を致しまして蓮正寺を出立致します。

○金比羅さんの御神酒

さて此方は源太郎でござります、蒲谷の我住居へ立ち歸つて参りましたが熱々考へた、

源「併し宮本と云ふ人物は天下の豪傑に違ひない、乃公ほどのものが宮本に敵はぬと云ふのは實にドウも大したものだ、乃公も今まで慢心増長をして居たが迎も宮本先生には敵はぬ、之れは寧ろ改心をして宮本先生に就て修業をしたら天晴の腕前になるであらう、之やア一層宮本先生に降参をしやう」
固より惻口の源太郎でござりますから初めて氣が着きまして、ソコで源太郎は

蓮正寺へ遣つて参ります、頼念に面會を致しまして。

源「さてお父上、寔に私は宮本先生に頼だ無禮を働きました、只今に至りまして私も大に後悔を致します、ドウか貴所から先生に宜しく御詫を願ひます、私は今日より心を改め宮本先生の門弟と相成つて腕前を研ぎたいござります」

頼念之れを聞いて、

頼「源太郎、貴様のやうな亂暴の奴は無い、折角先生をお連れ申し其方に意見をして頂かうと思つたのに一度ならず二度までも先生に手向ひをする夫れが爲に先生は大分に御立腹になつて貴様のやうなものには到底意見は出来ないとおつしや、もはやたうてらこしつたつと被仰つて最早當寺御出立になつた」
之れを聞いて源太郎、

源「夫れはドウも寔に残念の事をしました、然らば是から先生の後を追駈け

飽く迄先生に就いて私は修業を致したうござります 頼「夫れでは今の中ならさう澤山はお出にはなるまいから、先生のお跡を慕つて参り飽くまで先生に就いて修業を致し、阪崎の家名を立てまするやう」

と、そこで頼念は路銀と致して源太郎に金を一百兩遣りました、依て源太郎は父より百兩の金を貰ひ、宮本の跡をトツトツと追駈けて参ります、丁度岩口と云ふ所へ源太郎遣つて來ると向ふに見へまするのが武藏、

源「オーイ、オーイ」と後から呼びました、宮本振返つて見ると源太郎でござりますから、

武「ア、又遣つて來やがった」

所で源太郎、武藏の側へ参りまして、

源「さて先生寔に昨晚は先生へ對し無禮を働きました、譯次第もござりません、私も今度と云ふ今度は熱々改心を致しました、實に先生の御腕前に

は感心仕ります、是より先生の御門弟に遊ばして下さりませれば有難い次第でございます」
 これを聞いて武藏は、

武「源太郎真と其方は吹心を致したのでは無く、ソシな風を見せて拙者を欺き、拙者に油断をさせ宮本を討たんとする其方の計略ぢやないか」源太郎

源「チカ／＼以ちまして、私が一旦吹心を致した以上は先生に御手向ひをするやうな事はござりませぬ、ドウか先生御疑ひを晴して御門弟に遊ばして下さいますし」

と云ふのを聞いて武藏は、武「夫れでは乃公が是より同道を致し、豊前小倉に立ち歸つて其方に劍術を教へて遣るから一所に参れ」

と、兩人は此處を立つて吉野を見物致し、引返して泉州の堺から海路を取りまして小倉へ歸らうと云ふので是より大阪へ参りました。

大阪を丁度廿日程見物を致し夫れより堺へ参りまして龜屋と云ふ宿屋へ二人は泊りこみ、馬關行の船を尋ねて見ると五百石積の大吉丸と云ふ船が出ると申しますから、夫れでは其船で小倉へ歸らうと云ふので其晩は一泊致しまして只今では和船なんと云ふものは少なうござりますが昔は今のやうに汽船の無い時分で大抵航海をするには五百石積とか、八百石積とか云ふ和船に乗つて航海をしたもので、考へて見ると昔は不自由の世の中でござります。

さて翌朝になりますと愈々船が出ると云ふので兩人とも朝飯を喰べ、手廻りの荷物を持ちまして是より船に乗りましたが、此の船と云ふものは、天氣の時には却て陸を歩きますより氣が晴れて寢に宜しうござります、乗合は諸國の人々等丁度二十五六人も御座いましたらう、それがイロ／＼の面白い話を致しまして、中には國の自慢話をして居るものもござります、遙か向ふに見へまするは淡路島、此方に見へるは津ノ國摩耶山ナカ／＼絶景、

すると一人が、

○「若しく、エ、失禮ながら貴所はドチラでござります
 ×「私は 秋田
 でござります ○「秋田と云ふと何か名物がござりますか ×「有りませとも
 秋田の名物は第一吹葵が出来ます、日本で吹葵の良いのは秋田より外にはござ
 りません、此間出来ました大きな吹葵がござりますが、私はアンなのを見た
 事はござりません ○「へい、ごんな吹葵が出来ましたか ×「大きいの大
 くないのつて、幅の周囲が五間あります、莖が彼是一間半ばかりござります」
 秋田の人は大に法螺を吹いた ×「貴所は失禮ですがドチラで ○「私は奥州
 で ×「奥州には何か名産がござりますか ○「奥州の名産は馬です、馬は奥
 州が第一番です、此間 仙臺で出来た大きな馬がござりますが、是位の馬
 は二つとありますまい ×「へエ、一体ドンな馬が出来たんで ○「大きいの
 大きくないのつて夫れはナカク大したもので、此の馬を洗うのに大きな盥が

無かつたから近江の湖水へ連れて行つて馬を洗ひました」
 仙臺の人も随分秋田の人に負けない法螺を吹いて居ります、
 □「若し貴所は何方でござりますか △「へエ、私は紀州でござります
 紀州には何か名物がござりますか △「マア紀州は蜜柑の名物で、蜜柑では紀
 ノ國の蜜柑と云ふてマ日本一でござりませう、此の間大きな蜜柑が出来まし
 た □「へエ、ごんな蜜柑で △「蜜柑の大きさが八間ござりました、袋の實
 が三萬八千四百六十一粒ドゥです大きな蜜柑でござりませう」
 一同のものは呆れた、
 ○「大變な蜜柑があるものだ」
 すると此方の方に黙つて咄を聽いて居た一人の男、
 ▲「ヤ、先刻から聽いて居りやア好い氣になつて餘まり大きな法螺を吹
 くない、蜜柑が八間あるの、吹葵の葉が八間あるのと吐しやアがつたがソナ

馬鹿なものがあるものか」
すると一人が、

●「ハ、貴所は一体何方で
には何か名産がございますか」
▲「乃公、乃公は江戸だ ●「へ、江戸
だ、江戸にはドンなものでもある、汝達に見せていのは此間新場から観音
さんに奉納をした大きな太鼓だ ●「へ、どんな太鼓でございます
鼓の直径が八間ある、此の太鼓を一遍叩くと關八州へ聴えると云ふ」
之れを聞いて一同驚いて、

×「へ左様な太鼓がござりますか、ソんな大きな太鼓は一体何でござりますか」
▲「嗣は今紀州の人の話をした八間あると云ふ蜜柑を陰乾にした夫れを綴り
合せて胴にしたんだ ×「成程、さうして其の太鼓を張る皮は一体何でござ
りますか」 ▲「皮は仙臺の人の話をした、近江の琵琶湖で洗つたと云ふ馬

の皮を縫ひ合せて張つたのだ ×「へ成程、敲く棒はドンなもので ▲
棒、棒は秋田の人の話をした一間半もあらうと云ふ吹奏の莖を陰乾にしたの
を縫ぎ合せて用ゐたんだ」

江戸ッ兒は亂暴だ秋田の人と、仙臺の人と、紀州の人の三人の法螺を一所にし
て仕舞つた、さア、船中覆 顛るやうにワイ／＼と云ふて皆思ひ／＼に話を
して居る、すると傍に酒を呑で居た三人の商人休の男、

×「オイ、源さん 源何だ ×「弱つたな酒が無くなつた 源だから
乃公が言はぬ事ぢやない、宿で寂しくならぬやう十分に酒の準備をして行かう
と云ふにお前が諸がなかつたから酒が無くなつて了つた、併し今言ふた所で
船中には酒が無いからドウする事も出来ぬ、マア／＼仕方が無い辛抱をしやう
ぢやないか」
すると一人が、

▲「酒香と云ふものは意地の汚ないもので有ると思ふと呑みたくないが、無
いと思ふと矢鱈に呑みたいものだア、ドウか少しでも宜いからウラちよつと呑
みたいものだ」

と、頻に酒を呑みだがつて居ります、すると向ふの所に年頃三十一、二に相
成らうと云ふ一人の女、服装の拵へを見ると先づ大家の商人の内儀さんとし
見へない、ナカ／＼立派でござります、即て三人の所へ遣つて参りまして、

女「若し／＼最前から貴所方はお酒が無いと被仰つて居らつしやいますか、
丁度私か或人から頼まれてまして琴平様へ上げやうと思つて持つて参りまし
たお神酒が五升ござります、何も金比羅さんに五升の酒を上げぬでも構ひは致
しませんからお神酒を取つて置いた後を貴所方に差上りますから緩りお上りなさ
いまし」
商人之れを聽いて喜んだ、

○「若しお内儀さん夫れぢやア寔に濟みませんが金比羅さんの御神酒となれ
ば尙更結構だ、夫れぢやア折角でござりますから分けてお貰ひ申ませう」
女「さア／＼お易い事で」

三人は喜んだア右の女は樽の口を明けまして杯を出しまして其杯へ一盃お
神酒を取つて後の酒を其處へ出して、

女「さアまあお初を取りましたから後はみんな上げて宜しうござります」
X「さうでござりますか、夫れぢやドウも澤山に有難うござります」
すると右の女は乗合の人に向つて、

女「若し貴所方へ、此のお酒は金比羅様のお神酒でござります、船中災難
も無いやうに召上つては如何でござります」
之れを聽いて一同の乗合のものは外の酒とは違つて金比羅さんの御神酒だと云
ふから、船中何事も無いやうに ○「夫れぢやお神酒を一杯頂ませう」

と、差出したやつが何事も無いところからトンダ大事の種を蒔くと云ふお話し

〇二刀を取つたまゝ海の中へドファン

乗合の人は各自一杯を取出して一ぱつと呑むと之れは外の酒とは違つて
お神酒だと云ふから別段酒を呑まぬ人でも一杯宛を呑みました、中には好き
のものは五杯、六杯も呑む人がござります、すると傍らに居りました武蔵、源
太郎の所へも酒を持つて参りました、

女失禮ながらお武家様、貴所もお神酒を一杯召上りましては如何でござ
りますか、

此の折武蔵は、

〇「寒に御親切は有難いが吾々は近頃禁酒を致して居る、譬ひ神酒たりと
雖も酒は一滴も呑まぬからお断り申す、女左様でござりますか、併し外

の酒とは違つてお神酒でござりますが召上りしても罰の當るやうな事はご
ざりませうと思ひます、武折角だが一旦禁酒をした以上は譬ひ神酒たり
とも一杯でも呑む譯には相成らぬ、

武蔵は甚だ酒を好いた人だが何と思ひましたか此の酒ばかりは一滴も呑みませ
ん、其中に酒を呑んだものは皆バタ／＼と其處へ倒れます、駈を發いてグワッ
と皆寝込んで了ひました、

すると此の様子を見て居りました右の女は甲板へ上りまして、懐中から法螺貝
を取り出して沖の方を望んでブワ／＼と法螺貝を吹きました、と見る間に沖の
方から來りましたのが五六隻の小船、エイさ／＼と漕付けて参りましたのは彼
是五六十人の紛れも無い海賊の一團、艦で大吉丸の胴へバタツと合しますと
其まゝバタ／＼と乗込みました、此折一人の海賊は、

〇「お頭、首尾はドウです」と申します言葉に貝を吹いた女は、

女「モウ大丈夫だ、皆瘵れ薬を吞ましたからモウ氣遣ひは無い、併し彼所に居る二人の侍はドウしても吞まれえ、なに高の知れた青二才さア是から仕事に取りかゝらう」と云ふ、

此女は何者かと云ふと其頃有名の女海賊でござりまして、名前を龍宮のお辰と云ひ、九州から中國、四國の近海を荒して居ります女盜賊、随分昔は斯う云ふ海賊が彼方此方を徘徊して居りました、只今では宜い鹽梅に山賊とか、海賊と云ふものは根を斷つて居りますが、併し朝鮮の沿岸に参りますとナカク、豪い海賊があるさうでござります、幸ひに日本には山賊、海賊は無くなつて了ひましたのは全く之れは大正聖世の賜物、警察其他の取締が行届いて居る爲でござります、

そこで一同の海賊は寢て居ります客人の懐ろへ手を入れ勝手次第に胴巻を取り出し、或は荷物を船へ突込むと云ふやうの譯でござります、最前から之れ

を見て居りました武藏と源太郎の二人、

武「さてこそ推察の如く海賊に違ひない、イザ良民の爲め退治を致し呉ん」と、一刀を取つて立ち上り、武藏は龍宮のお辰に向ひ、

武「其方は女の分際を致して怪しからぬ奴だ、一同の者に瘵れ薬を吞ませ荷物、金を奪ひ取ると云ふは甚だ以て不埒の奴、斯く云ふ拙者が汝の一命は貰つたに依つて覺悟に及べッ」と一刀の鞘を拂ふ、お辰之れを見て、

辰「エ、生意氣な事を言ふな此の青二才奴、さア乃公の腕前を見せて遣る」と、女ながら大膽の奴、天下の豪傑武藏に對し短刀を取つて斬込で参ります、此折源太郎は一刀の鞘を拂つて、乾兒の海賊を相手に斬結びました、源太郎の及の爲に打たれるもの數知れず、船の中は實に大騒動でござります、龍宮のお辰は武藏を相手に暫らく斬結んで居りましたが何しろ相手は神免二刀

流の名人の聞えを取つた武藏、之れは逆も敵ひさうな氣遣ひはござりません、お辰は武藏の爲に後邊の方へ段々斬立られて参ります、お辰は此は敵はぬと思つた、海へ飛込で逃げやうとした奴を武藏、武汝、逃してなるものか」と一刀を取つてヤツ……と云ふ聲もろ共に斬下した、何條以て耐りませう、是が爲にお辰は、腰車の邊を確たかに斬込れましたからキヤツ……と云ふて、舳は海に落ちました。

此時武藏は勢ひ込で斬込ましたから舳は海の方へ少し瓢々きました、何しろ船の事でござりますから幾らか船は揺れて居る、所へ一足踏み込だ、船は益々よろ／＼と揺れる、暗さは暗し、終に武藏は足を踏み外して海中へ飛び込だアツ……と云ふ間もあらばこそ武藏は一刀を取つた儘海へドボンと落ちて了ひました。

此方は源太郎、大勢の海賊を相手に斬結んで居りました、最早頭も遣られた

と云ふので逆も之れは敵はぬと思つた、カトツ／＼と海へ飛込で海賊は逃げました、源太郎の爲に斬られたものは彼是二十人許り、船の中は鮮血淋漓として死骸は彼方此方に横はり實に目も當られぬ有様でござります、源太郎は血の滴る一刀を取つてホツと云ふ息を吐きました、マダ海賊は残つて居りはしないかと彼方此方を見たがモウ一人も居りません、

然るに武藏の姿も見へません、源太郎は、源先生は何處にお出でになつたらう」と、此方は大勢の海賊を相手に斬結んで居つたから武藏が海へ落ちた事は源太郎氣が着きません、さア彼方此方探して見たがドウしても武藏の在所が分りません、すると此折大吉丸の船頭作兵衛と云ふものが臚の横手から其處へ出て参りました、源太郎之れを見て、

源「オ、汝も海賊であるか」と、一刀を振り上げたから作兵衛、作「若し、私は盜賊ぢやござりません、大吉丸の船頭作兵衛と申すも

の、貴所のお蔭で客人に間違ひがござりません、寔にドウも有難うござります、併しお氣の毒の事を致しましたのはモウ一人の旦那様は龍宮のお辰を斬つた途端に、終に海へ飛込で了ひになりました、寔にドウもお氣の毒の事を致しました。

源太郎之れを聞いて。

源「エ、ッ、夫れぢや先生は海へお落ちになつたか、夫れは何しろ意外な事を致した、ドウだ貴様先生を探して呉れないか、船串戯被仰つちや不可ません、今飛込だ所ぢやなし、モウ大分時間も経つて居る、何處へ行つたか分りはしません、源何で貴様早く知らせない、作夫りやア御無理です、貴所は海賊と斬結んで居なさるし、ソナな所へ出て知らして御覽なさい私は生命がありません、夫れよりも怖くつて今稍つと頭へが止つた位の所で、そこで源太郎も實に茫然として。

源「ア、情けない、今にして先生とお別れ申すと云ふは寔にドウも残念の譯けれど探したからと云つてナカク分りさうな氣遣ひはない」

依て源太郎泣く、此の船を明石へ着けさせまして土地の役人に此事を届け出ましたから役人出張を致して一應取調べを致します、海賊の死骸は残らず取捨て了ひます、其中に漸く麻れ薬を呑だ乗合の人は生氣に返り、丸で夢の覺たやうの心持が致して皆呆氣に取られて居ります、テ船頭作兵衛は此事の爲に一旦泉州堺へ立ち戻る事になります。

源太郎、宮本武藏の生存が分りませんから之れば此儘にして置く譯にはいかぬ、一たび豊前の小笠原家へ参つて先生の御親族に此由を申上やうと、是より播州明石を出まして有名の書寫山に参詣を致す、書寫山に於て有名な山賊郷の平藏に出逢うと云ふお話。

〇事によつたら天狗の再来

さて源太郎は播州の書寫山に參詣をしやうと云ふので遣つて参りました。御承知の通り播州書寫山は武藏坊辨慶の成長を致した所で有名の御山でござります。只今では大分道も好くなつて居りますが何しろ其の古への事でござりますから非常に道も悪うござります。テ今山にかゝりますと向ふに一軒の茶店がありますから此の茶店へ源太郎入りまして、

源「許せッ 亭「入らつしやいまし 源「好い天氣だな 亭「左様でござります、ドウか續けたいものでござります 源「時に亭主、是から奥の院へ參詣をしやうと思ふんだが拙者は初めての事で一向に分らぬ、誰か案内者を頼みたいと思ふが、案内者はあるまいか 亭「左様でござります、別段に案内者と申してはありませぬ、モウ少し経ちますと私の伴が歸つて参ります、貴

所お一人で道が分りませんければ伴を着けて上げませう 源「夫れは千萬忝けない、然らばドウか案内をして呉れるやう」
そこで源太郎は茶店の爺と暫らく話をして居ると立ち歸つて参りましたのは伴と見へまして、

子「父さんや今歸つて来たよ 爺「オ、伴り、マア遠い所を大きに今日は御苦勞だつた、疲勞て居る所へな寔に氣の毒だが、此處にお出でのお武家さんが奥の院へ御參詣なさりたい、夫れに就き道案内を頼みたいと被仰るが御前一つ御案内をして上げては呉れないか 子「ア、さうですか、宜うござります。夫れぢやア旦那、私が御案内致しませう」
源太郎は道案内が出来ましたから茶店の伴を連れて段々と山へ懸つて参りますると道案内を致した男が、

子「旦那様 源「何だ 子「モウ此處まで私はお供を致しましたが是から先

はドウッ貴所一人で行らつしやつて下さいまし、道は之れを真直に何處までも
 お出になりますれば自然に奥ノ院へ参りますからドウか一つ之れでお暇を頂
 たいもので……源「夫れは困るな、之れから先が肝腎だ、ドウかソんな事
 を言はぬでお前も折角是れ迄来て呉れたものだからモウ少しの所だ案内をし
 て呉れ」子「夫れは御尤もでござりますが、是から先は迂濶には行かれませ
 源「ドウ云ふ譯で行かれぬか」子「左様でござりますが、是から先には天狗が
 居りますから險谷でござります」源「馬鹿な事を云ふな、世の中に天狗、魔人
 なぞ云ふものが滅多に在る譯のものでは無い、ソんな事を言はぬで乃公か一所
 に行けば天狗が出やうが何が出やうが大丈夫だ」
 イロ／＼に源太郎申しましたが何と云ふても諾ません、
 子「モウ私は之れでお暇を頂きます」と、トツ／＼と行つて了ひました
 源太郎は據るなく教へられた道をトツ／＼と遣つて参ります、今丁度丸木橋

を渡らうと致しますと一發の彈丸がボン……と云ふと頭上を掠めます、之れ
 はと思ふと又復二發目の丸が源太郎の袂を打ち抜きます、道の源太郎も之れ
 には驚いた、何ば天下の豪傑でも飛道具には敵ひません、何者が斯様の事を致
 すぞと様子を窺つて居ると一人の男身の丈六尺有餘、服装はと云ふと黒羽二
 重の紋付に紺純子の黒天鷲絨を以て深縁したる野袴、金造りの大小、威ケ目し
 き風をしまして右の手に種ヶ島の短銃を取つてトツ／＼と其處へ遣つて参り
 ました。
 これを見て源太郎大に怒り、
 源「汝は何奴であるか、卑怯にも拙者を飛道具を以て討たんと致す不埒の奴
 名前を名乗つて勝負に及べ」すると右の男は「賊拙者こそは此の書寫山の
 奥に山寮を構へ乾兒三百人を随へ武勇遠近に隠れなき郷ノ平藏と云ふ山賊だ、
 汝に意趣遣恨は無いが、懐ろの金に用事がある、キリ／＼置いて行け」源「

吐いたりや小賊、吾れは何と思ふ、景上出羽ノ守の家老三萬五千石阪崎甲斐守の遺兒、阪崎源太郎なるを良民を憐ます山賊覺悟に及べし」と、腰に帶せし頼太郎國行の一刀の柄に手を掛け鞘を拂ひました、此の折郷ノ平藏、之れも同じく後方へ下りまして腰なる一刀の鞘を拂ひ、

平「小童覺悟に及べし」

と、源太郎の眞向より望んで斬込て來ましたが源太郎は「心得たり」とあつて郷ノ平藏を相手に暫らくの間斬結んで居りました、

此時源太郎、心中に郷ノ平藏を一番驚かして遣らうと、ヤツ……と云ふ氣合を掛けると突、然空中へ飛び上り松の木の上へ源太郎上りました、郷ノ平藏驚いた、今まで目の前に居た源太郎が何處へか空になつて了つたから、

平「何たらう彼奴は化物か知らん、今まで随分イロ／＼の奴に邂逅したが此様な不思議の奴に出逢つた事がない、天狗覺人の再來か知ら……」

と、郷の平藏四邊をキヨロ／＼眺めて居ります、すると源太郎松の木に腰を架けポン／＼と手を叩いて、

源「オ、何處を探して居る、天狗でも覺人でも無い、此處に居る」と、申しますから郷の平藏驚いて、顧眄つて見ると遙か高い松の枝に源太郎乗つて居ります、郷の平藏之れを見て、

平「汝れ卑怯の奴だ、我腕前に及ばぬと思つて左様の所へ參り生命を遁れんと致す、此處へ來て尋常に勝負に及べ、源「黙れ、汝の如き腕前に恐れを爲すやうの拙者では無い、實は今腹が減つて來たから勝負が出来ない、今此處で辨當を食うから暫らく待つて居れ」

と、源太郎辨當を開いて松の木の上で辨當を食つて居ります、郷の平藏之れを見て、

平「呑氣な奴もあればあるものだ、勝負をし乍ら辨當を食ふと云ふのは實に

大膽の奴もあればあるものだ」
と、大に驚いた、其中に源太郎松の木の上で辨當を食つて、

源「ア、漸く腹が膨んだ、さアモウ大丈夫、之れから乃公が勝負をして遣ると、ヤツ……と云ふ氣合と共に松の木から飛び下りました、そこで又復郷ノ平藏と暫らくの間斬結んで居ります内に、源太郎はヤツ……と云ふと七八間上へ飛び上つたから郷ノ平藏之れには往生をして居る、

お話變つて書寫山参りの大勢の行者達、先達が先きへ立つてズン／＼遣つて参りました、すると今谷間に當つてチャン／＼チャリンと云ふ真劍の音が致します、谷を覗いて見ると一人は年頃三十八九、一人はマダ年の若い侍が真劍勝負をして居ります、行者連之れを見て驚いた、

「若しく先達さん 先何だ X」大變でござります、彼處に侍が真劍の勝負をして居ります、私はマダ真劍勝負と云ふものは見た事がござり

ませんが、何しろ之れは好い見物だ」

と云ふて一同の者が見物を致して居りますすると、時々源太郎がヒヨイ／＼と飛び上ります、行者参り之れを見て、

○「何だらう彼れは、恐ろしいドゥも身の軽い奴もあればあるもので、時々飛び上がるが、ハ、ア之れは事に依つたら天狗の再来か知らん、ナカ／＼何うも人間にはア、云ふ事は出来ない」
愈々天狗だと云ふので一同のものはワイ／＼云ふて見て居りました。

○お師匠さんはギツ子

所へ麓の方より致して登つて参ります一人の侍、大勢の立つて居る其處へ遣つて参りまして、

侍「コレ／＼貴様達は何を見て居る X」ヤア、お武家様でござりますか、

○「マアちよいと御覽なさいまし只今彼の谷で侍が真劍勝負をして居ります、一人は天狗の再来か、アノ通りピヨイ〜と飛び上ります、不思議の人間もあればあるもので」テ右の侍は谷間の方を見て居りましたが、侍「成程ナカ〜彼の若い者は豪いな ○「左様でござります、一体アレは旦那何でござります 侍「オ、彼が、あれは天狗ぢやアない人間に違ひないが、アレは餘程腕前の達して居るものぢや、此處で見て居ても寔に遠方だから都合が悪、彼處まで行くには大分道があるだらう ○「左様でござります、アノ谷へお下になるには是からズツと廻つてお下になりませなければ逆も行かれません 侍「オ、夫れなら此處から向ふまで飛たら直だらう ○「串戯被仰つて、成る程彼處まで飛べば近いですが、鳥や何かぢやあるまいし、ソんな事の出来るものぢやござりません」

此折右の侍は、

侍「左様か、然らば乃公が今向ふへ飛で見せるから見物をして居れ」と、ヤツと云ふ聲を掛けたかと思ふと突然谷へ飛び下りました、其の早業と云ふものは實に羽でも生えて居たかと思ふ位、行者参り之れを見て驚いた、

×「オヤ〜又一人天狗が殖へて来た、何でも之れば人間ぢやない」と、云ふて一同喫驚致しました。

此方は源太郎、郷ノ平藏を相手に斬結んで居ります、所で右の侍は源太郎の側へ参りまして、

侍「オ、其方は源太郎ぢやないか」

源太郎見ると宮本武藏でござりますから大に驚いて、

源「貴所は宮本先生で入らつしやいますか、ドウして此處へお出になりました 武「夫れは後で緩り乃公が話をするが一体其者は何だ 源「エ、之れは先生此の書寫山に山祭を構へて居ります郷ノ平藏と云ふ山賊でござります

私を鐵砲で撃たうと致した不埒の奴でござります。宮、何だ山賊か、夫れなら其方何で早く斬つて了はぬのか。源「左様でござります、斬るのは譯はござりませんが、私は退風でござりますから暫らて翳つて遣つて、其上で殺して遣らうと思ひます」

郷ノ平藏驚いた、翳りものにされて耐る譯のものではござりません、此の時武藏、

武「源太郎、猶豫を致さず早く斬つて了へ。源長りました」
之れを聽いて郷ノ平藏、

平「汝れ猪小才な奴だ」と、一刀を取つて源太郎の眞向より斬込で参りました、

軀を轉じて源太郎頼太郎國行の一刀を執つて郷ノ平藏の肩先から胸へ掛けて斬込だキヤツ……と云ふ一聲も共血煙立つて其儘平藏は唯だ一刀の下

に其場に倒れます、武藏之れを見て、

武「オ、天晴なる其方の腕前、實に感心を致した、併し源太郎拙者は其方も承知の通り大吉丸に於て、龍宮のお辰を相手に斬結び、幸ひ斬捨たる途端誤つて海中に落ち込だが天の祐けか測らす通りかゝつた漁船の爲に生命を救

はれ其方の行衛は如何相成つたかと諸所方々を尋れたがドウしても相分らぬ依て、致方が無いから此の書寫山に参詣を致し然る後故郷小倉へ歸らうと思つて實は此處へ参つた、お互に無事で結構である。源「左様でござります、先

生何しろドウも危ない事でござりました、併しお互に無事でござりまして寔に仕合せ、私は先生の生死が分りませんから、豊前小倉へ参つて此事を御親族へ

申上やうと、途中此の書寫山は先生のお名前の武藏に縁故ある、武藏坊辨慶の成長した御山でありますゆへ、實は先生の御無事を祈る旁々参詣に参りました」

是より武藏、源太郎は種々の話を致して居ります、即て武藏は源太郎に向ひ
 武「其方に尋ねる事があるが其方は蓮正寺に於て斯く云ふ武藏と立合を致し
 た時に雲に乗つて姿を隠したが只今其方の腕技術を見た所が折々に七八間
 上へ飛び上る實に不思議の術を心得て居るが一体ソンの事を誰に教はつた、
 源「左様でござります、斯様な事を申上ては甚だ面目次第もござりません
 が、之れは私はギツネ（狐）から教はりました」
 武藏之れを聽いて、

武「之れく源太郎拙者はギツネと云ふ事は聞いたがギツネと云ふものは
 知らぬ、一体夫れは何だ 源「左様でござります、普通のは狐でござります
 が、私のはギツネでござりませう、其譯をお話申します」と、是より源太郎
 武藏に此術を教はりました物語を致します、
 之れはドウ云ふ譯かと申しますると頃は文治二年十一月御承知の通り禁裏守護

職として大勳功ある九郎判官源義經公が鎌倉の執權北條四郎時政
 梶原平三景時の讒言に依り頼朝公と御仲不和と相成り遊ばし夫れが爲に諸
 國大名は頼朝公の命令に依り京都堀川館へ攻め登りました、
 けれども義經公は何分にも兄に對し抵抗する事は出来ませんから、残念なが
 ら京都を落ち退き給ひ、昨日に變る今日の身の上、天下無祿の御浪人とお成り
 遊ばし、そこで武藏坊辨慶を首め太塔坊蓮房、伊勢の三郎、龜井の次郎、
 片岡太郎等以上十三人を随へ、落ち行く先は九州豊後尾形三郎方へ参らん
 と、尼ヶ崎から船に乗つて播州灘へかりました、
 然るに新中納言知盛の亡靈に妨げられて風波の爲に住吉の濱に吹き戻され、
 依て詮方なく、主従は芳野山を指して、芳野は義光院と云ふへ暫らく隠ま
 はれて居ります、然るに芳野の荒法師に湯川の覺範と云ふ坊主がござりました
 之れがナカク坊主とは言ひながら餘程の豪傑でござります、只今とは違ひま

して昔は坊主に豪いのが幾らもござりました、テ此の湯川の覺範は六百の山法師を随へ藏王権現の鐘を打ち鳴し、薙刀、或は鉾を携へ義經主従の召捕に向ひます、此時に義經公は辨慶に向ひ、

「義」余は此の所に於て討死を致す、汝等は早く何れへなりと落ち延び生命を全う致して呉れよ」

然るに此の時奥州信夫の里の住人佐藤庄司元信の伴、佐藤次郎兵衛忠信と云ふ豪傑がござりました、此の折忠信義經公に向ひ、

「忠」恐れ乍ら私が君の御身代りと相成り山法師を引受け此の所に於て討死を致します、依て君には一日も早く此の所を落ちさせ給へ」

と申上る、ソコで忠信は義經公から源家重代の緋緘の鎧、金の鍬形打つたる龍頭の兜、此の龍頭の兜と申すものは身分の無いものには冠れませんが、義經公は固より源家の正統、且つは禁裡守護職までもなし、又征夷大將

軍御兄頼朝公よりは平家征討の大將をも御任せになつた立派なお方、夫れ故御召の緋緘の鎧を初めとして鍬形の兜、夫れに亦た薄緑と名けましたる御太刀を頂き、義經公と名乗りを上げ六百人の山法師を相手に斬結びます、併し向ふは大勢、此方は一人、終に忠信は横手の蹴拔の塔に上ります、

大勢の山法師は之れを見るより蹴拔の塔の周圍を十重、廿重に取圍みますテ忠信は致し方がござりません、此の所に於て生命を捨つるは、大に殘念、サ運を天に任せ斬抜けられる丈は斬除て見やうと蹴拔の塔の上よりエイツ、ヤツ……と云ふ氣合もる共飛び下りました、

すると大勢の山法師は忠信の前後から兇器を携へ取圍んで参ります、此の折忠信「忠」心得たり」とあつて太刀の目抜の續くだけ、斬つて斬つて斬巻り、敵は何時は自殺を致して相果てやうと、當るを幸ひ斬り巻り少時の間に法師の首三十五六も取りました、

そこで山法師は忠信の勢ひに驚いてアツと云つて後部に下りましたから此間に忠信は一方の血路を開き漸く此の所を一先づ遁れる事に相成りました、
 ですが忠信は外に行く所が無いので京都今出川と云ふ所に菊の前と云ふ浮れ女がある、之れは只今の娼妓とは違ひまして舞姫、或は浮れ女と云ふやうなものでござります、詰り當今の藝妓も同様でござりますが、少しく昔の方が品格があるやうにも思はれます、
 此の菊の前と云ふ女に忠信が馴染を重けて居ります、豪傑は兎角女を好みます、忠信も何時の間にか此の女と馴染で居つたと見へまして、
 そこで菊の前の所へ参りまして自分の身の上の話を致し、實は是れく斯う云ふ次第、暫らくの間隠まつて呉れ、と頼みますと、菊の前も仕方ないから忠信を隠まつ事に成ります、
 然るに此事をば何者が注進致したか、江馬ノ平四郎景則の同勢三百人忠信

を召捕に向ひましたが、此の時は忠信傍らにござりました碁盤を取つて、江馬ノ平四郎景則の同勢五人を毆殺したと云ふ、實に非凡の豪傑でござります之れを俗に碁盤忠信と云ふて能く芝居などでは致します、併し寡は衆に敵せずの慣ひ、終に忠信は召捕に相成りました、
 此の忠信の兄弟は義經の爲には大に忠義を盡した人で、忠信の弟に佐藤嗣信と云ふ豪傑がござります、此人は矢張義經公の御身代りとなつて屋島壇ノ浦の戦に平家方の剛弓の名人と言はれました能登ノ守教經の強弓にひつて終に討死を致しました、
 さて義經公は忠信の忠義に依りまして漸く此の場をお遁れに相成りまして、義光院を御出立に相成る、いづり葉の峠と云ふへお掛りになりました、
 すると十一月の寒空俄に降出す大雪は平一面の銀世界、寒さを耐へて主従は降り来る雪に袖を拂ひ、白糸の瀧まで來ましたが斷へ間なく降り来る雪は道

を埋め更に道が分らなくなつたので御座います。固より勝手知れぬ山の中で一同は之れには當惑を致しました。雪と云ふものは少し位降ると寔に好いものでござりますが、道の分らなくなる程澤山降つて來ますと、是位始末の悪いものはござりません、此の時義經公は辨慶にお向ひ遊ばして、

義「最早余の運命も是迄である、死ぬべき時に死なざれば死に優るの恥ありとかや、潔きよく此の所に於て余は切腹を致して相果る」と申された言葉に辨慶は最早此の上はお慰め參らする術もござりませんから、皆々眼を壓叩いて嘆息を致して居ります。

所へ遙か向うの方より致しまして白の犬のやうなものが遣つて參ります、一同は見ると之れ即ち白狐と云ふ奴、狐もイロく有るさうでござります。白いのを白狐と云ひ、黒いのを黒狐と云ひ、黄いのを黄狐と云ひ、或は天狐など

云ふやうに、此の天狐と云ふのは所謂神の使で、天狐となると雲を起し風を呼び、或は一瞬千里を走り、神通自左ださうでござります。

然るに此の白狐が辨慶の側へ參りまして、袴の縁を咬へて頬に斯う引張ります。之れは人間で云へば「貴所は定めし行く所の道が分らぬでお困りでござりませう、私が道の分る所まで御案内を致しますからお出でなさい」と云ふのでござります。

それで辨慶は此の白狐に引る儘段々と遣つて參りました、丁度宇陀郡まで此の白狐が案内を致します、是れが爲め義經主従は白狐の爲に危うき生命を助かりました、そこで義經公は此の白狐にお向ひ遊ばして、

義「何と畜生とは申し乍ら人間にも優る奴、汝の爲に我々主従は無い生命が助かつた、依て其方へ褒美と致して余が名前を遣はす、以後源九郎狐と名乗れ」

と、被仰つた、狐め、食物でも貰へば宜いが詰らぬ名前を貰つた、で義經の義と云ふ字は音で讀むと義と讀みますから、此の狐の事を源九郎ギツネと申します、今に至りて大和の郡山には正一位稻荷大明神と此の白狐が祭つてあるさうでござります、

さて源太郎はドウして此の狐に術を教はつたかと云ふに蓮正寺の頼念に育てられまして年十五才の折に弓矢を携へ小鳥打に山奥へ入りますと遙か向ふの所に一人の白髪の老人が杖を節いて待つて居ります、源太郎見ると實に人間とは思はれません、全然る仙人のやうな老人、顔と涙を溢して居ります此の涙と云ふものは元來悲しい時や或は辛い時に流すもので滅多に出るものではないでござりません、テ源太郎不思議に思ひ右の老人の傍へ参りまして、

源「若しく老人、最前から尊公は泣いてお出でなさるが一体ドウなすつたんだ」

此時右の老人は、

老「左様でござります、私の子供が此の機檻の中に落ちて居ります、大きな石の下になつて居りまして老人の力では助ける事が出来ません、幸ひに貴所はお力があるやうに見受けます、ドウぞ此の機檻の子供を助けて下さいまし、其代り貴所のお願ひは何なりと私が敵へて上げます」切なる老人の頼みに源太郎、

源「宜しい、然らば拙者が助けて上げる」

と、両手を掛けヤツ……と云ふと石を取除まして申を見ると、人間の子と思ひの外狐の子が二疋入つて居ります、源太郎大に驚いた、すると穴から上つて来た子狐は老人の裾へ隠れました、此の折老人は源太郎に向ひ、

老「私は人間にあらず、寔は源九郎ギツネと申すもの、貴所の爲に子供二匹を助けて戴きまして寔に有難うござります」

此時右の老人は、

老「左様でござります、私の子供が此の機檻の中に落ちて居ります、大きな石の下になつて居りまして老人の力では助ける事が出来ません、幸ひに貴所はお力があるやうに見受けます、ドウぞ此の機檻の子供を助けて下さいまし、其代り貴所のお願ひは何なりと私が敵へて上げます」切なる老人の頼みに源太郎、

源「宜しい、然らば拙者が助けて上げる」

と、両手を掛けヤツ……と云ふと石を取除まして申を見ると、人間の子と思ひの外狐の子が二疋入つて居ります、源太郎大に驚いた、すると穴から上つて来た子狐は老人の裾へ隠れました、此の折老人は源太郎に向ひ、

老「私は人間にあらず、寔は源九郎ギツネと申すもの、貴所の爲に子供二匹を助けて戴きまして寔に有難うござります」

と云ふのを聴いて源太郎「其方は源九郎ギツネであるか、拙者は將來天下に
名前を挙げやうと思ふものだが何か乃公に一つ術を教へて貰ひたいものだ」
すると源九郎ギツネ。

狐「然らば私が貴所に雲隠れの術、飛切の術と申すものを教へます、又貴所
の陸身に付き添ひ、萬一貴所の御身の危い時には必ず私が黙ながらお助
け申します」

と、是から源太郎に雲隠れの術、又飛切の術を教へます、そこで劍術は此の
奥山に加藤十葉の中の勇士加藤清兵衛絶清と云ふ豪傑が隠遁をして居りました
から夫れに就いて學んだ、さればこそ武藏も驚きました腕前になつたのでござ
ります。

以上の物語を武藏に對し源太郎致します、武藏之れを聴いて感心を致し。

武「ア、左様か、ドウも拙者は人間業では無いと心得て居つたが、併し源

太郎決して左様な事は人に申しては相成らぬ、人間なら兎も角今日畜生から
左様な術を教へたとなつては其方の恥に相成る、以來は決して左様な術を猥
に行ふな、さも無いと人が其方を怪しむ」

と云ふて源太郎に諫言を致します、そこで是より兩人は書寫山を下りまして
土地の役員に對し山賊郷ノ平藏を打取りました事をお届け致し兩人身を淨め
更に書寫山に參詣を致して夫れより備前の岡山へ參ります、然るに此の岡山
に於て武藏、源太郎一の大難を受くると云ふお話

〇十八貫五百目の錫杖でゴツリく

さて武藏、源太郎は備前の岡山へ參ります、只今では先づ中國では廣島に次ぐ
の都會でござります、追々岡山も只今では開けて參りましたが其頃ひは松
平伊豫守殿の御領地で只今ほ盛んではござりません、併し何しろ有名の所

でござります、吉備神社に参詣を致して鳥居前へ出ると向ふに一軒の料理店がござります、之れは腰架でも吞めるし、奥へ上つても吞める、チヨツとした小料理屋でござります、此店で晝食を使はうと云ふので、二人が入つて参りました。

亭主「入らつしやいませ、武酒をドウか燗て呉るやう、主長りました、即て二人は酒肴を取つて一杯吞で居ります、所へ入つて参りましたのは當時岡山に於て一刀流の道場を開いて居る淺湯新六郎勝俊、門弟十三人を率いて此の家に入つて参ります。」

新「許セツ、主「入らつしやいませ、新「寔に好い天氣で結構だな、主「左様でござります、今日も先生御参詣でござりますか、寔にドウも毎日の御参詣結構でござります。」
すると湯淺新六郎。」

新「之れく亭主娘はドウした、主「へ、只今奥で髪結が参りまして髪を結らて居ります、新「ア、さうか、髪を結うて仕舞たら茶を一杯汲んで来て呉るやう娘に言ふて呉れ。」

此の湯淺新六郎は當料理店の娘おイソと云ふものに大變に惚れて居ります、テ此のお磯はナカくの美人、年は十八、田舎には稀なる美人でござります、新六郎が毎日此神へ参詣すると云ふも實は此の家へ参りまして娘の顔を見るのが樂みでござります、神様も斯様な事に託けにされては耐りません、暫らく経つと娘のお磯は髪を結ひ替へ、着物を着替へ、即て盆の上へ茶を載せまして店へ持つて参ります。

娘「オヤ先生でござりますか、入らつしやいませ、新「オ、磯か、やア、どうも今日は好い天氣で……大層髪が能く出来たな、娘「有難うござります、アお茶を一つ召しませ。」

と、前へ盆を出しました、十三人の門弟は皆茶碗を取ります、後に残った茶碗を湯淺新六郎取らないでお磯の顔許見て居る。

磯「どうか先生茶碗をお取り遊ばして」

と譏ら言つても新六郎茶碗を取らない、さアお磯は極りが悪くて不可ませんすると湯淺新六郎が今茶碗を取らうとして持ったがお磯の顔を懐かしげに又もや茶碗を置かうとした、お磯は新六郎が茶碗を取つたと思つたから盆を手許へ引く、夫れとは氣着かず新六郎は盆がマダ在ると思つて茶碗を放した其の機に新六郎の膝へ熱い茶碗が轉覆えつた、新六郎怒つたの怒らぬのぢやない。

新「不埒の女だ、何で拙者の膝に茶碗を投げた、コンな熱い茶を浴られて耐るものではない、焼傷をするわ 磯「夫れは先生御無理でござります、何も私が態と浴けた譯ではありません、貴所が茶碗をお取りになつて落したので私の粗忽ではござりません、貴所がお悪いので……」 新「黙れ、汝れ不埒の事

を云ふ、誰か熱い茶碗を膝の上へ落す奴があるものか、能くも汝れ武士に對し恥辱を與へたな」

と云ふより早く新六郎右の茶碗を取つてお磯へ投げ着けた、すると此の茶碗がお磯に中らないで傍の柱に當りまして茶碗が粉微塵に毀れます、其の缺けが側に酒を呑で居つた源太郎の肩間に當りました何しろ瀬戸物の事であるゆへ源太郎の肩間に傷が着きます、此の折源太郎。

源「アイや御武家之れば怪しからぬ、拙者へ對して何で斯様な事を致した、男子の前額へ對して何で傷を畫けた。」

之れを見て新六郎は驚いた、自分が源太郎に何も怪我をさせやうと思つて打ち着けたのぢやない。

新「之ればお旅の御武家、寔に失禮を致した、拙者は敢て尊公に投げ付ける積りは無い、當家の娘が拙者に無禮をしたに就き投げ付けたる茶碗、誤つて尊

公の眉間に當つた、甚だ失禮を致した、ドウか御勘辨を願ひたい」

源太郎年若いからナカ／＼承知を致しません。

源「汝れ不埒の奴、侍ともあるべきものが女を捉えて譬ひ無禮を致したか
らと云つて物を投るとは甚だ以て宜しくない、拙者男子として眉間を破られた
以上は此儘に勘辨は相成らぬ、さア、イザ尋常に眞劍の勝負を致せッ」
湯淺新六郎驚いた。

新「寔にドウも御立腹は御尤もでござりますが、偏に御勘辨の程を願ひます
る」

いろ／＼詫言しましたがドウしても源太郎承知を致しません、此の折傍に見て居
りました武藏は源太郎の袖を引き。

武「コラ／＼源太郎マア／＼勘辨をして遣れ、先方はアノ通り詫を致して居
るでは無いか、マア宜い加減に其方も勘辨をして遣れ 源「夫れは先生不可ま

せん、私は外の事なら決して貴所のお言葉には背きません、併し今日男子たる
べきものが眉間を破られました此儘に勘辨をすると云ふ事は出来ません、打つ
打たるは時の運、私は眞劍の勝負を致します」
と、どうしても源太郎聞き容れない、すると湯淺新六郎も門弟の前もあるし
ドウも據るござりませんから。

新「然らば思召とあらば眞劍勝負を致しませう」

と、是より源太郎と、湯淺新六郎は表へ出ました、此の折武藏は相手は十三
人、源太郎一人では萬一の事があつては相成らぬと思ひましたから、料理屋の
亭主を呼んで。

武「之れ／＼御亭主實にドウも思ひの外の事が出来た 主「寔に旦那様申
譯がござりません、娘の爲に貴所方にまで御迷惑を掛けます、ドウも寔に御氣
の毒でござります 武「夫れは已に出来た事であるに依つて致し方が無い就て

は此處に金子が二百兩ある、此の金子を其方の所へ預けて置くから若し吾々が運拙なく致して大勢の者に打たるゝやうの事があれば此の金を以て後の問ひ吊ひをして呉れるやうに」

と乃で辨へのある武藏でござりませうから是ばかりは幾ら自分が強くても勝負は時の運、ドウ云ふ事に相成るかも知りませうから後の事を亭主に頼む、テ武藏は仕度を致して外へ出て。

武源太郎は湯淺新六郎を相手に致せ、門弟十三人は余が相手を致す」

湯淺新六郎は源太郎が年が若いから「なア一に高の知れた若者が」

と心で馬鹿に致します、一刀の鞘を拂つて「イザ来い」と、身構へをする。

源太郎は夫の頼太郎國行の一刀を取つてヤツ……と云ふとヒタリと着ける双方暫らくの間隙を窺つて居る。

然るに湯淺新六郎の身軀に隙があつたヤツ……と云ふと源太郎斬込で

参ります「心得たり」とあつて、湯淺新六郎も一刀流の道場を開く位の腕前でござりませうから下拙ではござりませう、暫時の間斬結んで居たが逆も源太郎の腕前には及びませう、終に源太郎の爲に肩口を斬られます、アツと其處へ倒れる此の折武藏は新六郎の門弟三四人を其の所へ斬捨てました、何しろ武藏は神免二刀流の名人宮本武藏正名でござります。

然るに此の事何者が湯淺新六郎の道場へ知らせたか、新六郎の門弟彼是七八十人夫れ先生を助けよと云ふので吉備神社の鳥居前へアツと許りに押掛けて参ります。

之れを見て道場の武藏、源太郎も弱つた、向ふは何しろ七八十人の同勢、此方は僅か二人、如何なる豪傑と雖も人間の力と云ふものは限りのあるもの、斯く大勢に取巻かれては所詮敵ひませう、併し最早斯う云ふ場合でござりませうから逃げる事も引く事も出来ませう、此上は致し方が無いから大勢を相手に斬死

をしやうと云ふので二人は覺悟を致して居ります。
 然るに一同の門弟は「先生の敵だ」と云ふので八方より斬込んで参ります。是れを見ました折武藏、源太郎は刀の目扱の續くだけ斬つて斬捨て獅子奮迅の如く大勢を相手に斬結びます。
 然る所遙々向ふに方りましてヤツと云つて駈け着けて参りましたる一人の大坊主、身の丈六尺有餘に致して身には鼠木綿の着物、麻の法衣、錫杖を小腋に掖い込で之れへ乗込で参ります。其の勢ひは宛然我朝の武藏坊辨慶、唐士の關羽、同じく魯知新の再來かと思はる、許、之れなん大和ノ國は蓮正寺の住職夜及五郎頼念でござります。
 持つて居る錫杖の目方は十八貫五百目ある、此時頼念は武藏、源太郎に向ひまして。
 頼「アイヤ先生、私は源太郎の事をば貴所にお願ひ致し、私も改心を致して

賊を止め、手下に残らず金を配分致し自分は後生安樂を願ひ、是迄大勢の人を斬殺した罪滅しを致さんと蓮正寺を立ち出で、先づ第一に大和路を廻り紀州へ出で堺の港より船に乗り播州へ着し、此處彼處と参詣を致し、備前の岡山へ出て参りました、今宗忠神社へ参詣をしやうとすると、鳥居前に於て眞劍の勝負と承はり來て見れば、豊測らんや先生が身の上の一大事と心得ました故、斯く云ふ頼念が此の錫杖を以て片端より引導を渡して遣りますか
 ら先生御安心なさいまし」
 コンな錫杖で引導を渡された日には耐つたものではござりません、之れを見て武藏、源太郎は大に喜んだ、頼念が來れば大丈夫と思つて、妙なものの方になる人が出來て來ると、人間と云ふものは勇氣百倍になります、そこで頼念は十八貫五百目の錫杖を取つて當るを幸ひ、誰彼の嫌ひなく片端から新六郎の門弟を打ち倒しました。

頼念の錫杖に當つて倒るゝもの數知れず、忽ちの間に二十四五人と云ふものを打ち倒した、頼念の錫杖に當つたものは頭の骨は砕け、脊骨は折れ、腕は挫かれ、足を折られると云ふ實に大變の騒ぎでござります、勿論斯く大勢を相手にする時には、刀より、却て斯う云ふ兇物の方が便利でござります、刀と云ふものはドンナ劍道の名人でも一人を斬るより外には仕方の無いもので、だから昔から豪傑は戰場へ出る時には鐵棒などを以て戰場を往來致します、有名なる佐久間玄蕃盛政など云ふ人も戰場へ出る時には真劍を持ちません、鐵棒を持つて敵を惱ましたと云ふ事でござります。

そこで湯淺新六郎の門弟は此の勢ひに僻易致しまして此は敵はじと終に此の場を逃げ去り今は一人も居なくなつて了ひましたから武藏は頼念に向ひ、

武「之れはく和尚宜い所へ來合せて呉れた、實は之れく斯う云ふ次第、已に吾々は此の所に於て一命を失はんと致したが、幸ひ貴僧の御座を以て吾々

いのちを全う致した、併し吾々は斯く大勢の人を殺したる事ゆへ、速に此の事を名乗つて出で相當の處置を受ける、貴僧は早く此の場を引上げて下さい」とすると頼念は武藏に向ひまして。

頼「先生夫れは不可ません、貴所は大切の御身の上私に最早此の世に用事の無い鉢、御承知の通り是迄大勢の人を殺した、悪い事をして來た私でござりますから、今死でも私に心残りはござりません、此の場は私が引受けますから貴所は早く御出立を願ひたい、武「夫れは不可ない、貴僧に迷惑を掛けば捕者が濟まないから吾々が名乗つて出る」と云ふ、此んなことで暫らく二人は押問答を致しましたが、傍らの源太郎源「先生折角父がア、申すものでござりますから、兎に角後の所は父に頼み此の所を一先づ引揚ぐる事に致しましては如何でござります、武「夫れでは寔に氣の毒だが、頼念、貴僧の厚意に従つて吾々は此の所を引上げる、後の

所は何分宜しく頼む 頼「委細承知を致しました」
テ兩人は役人の來ない間に此の場を引上ぐる事に成りました。

〇一人二人は面倒

所で此の騒動を聞いて岡山城中より致して町奉行下村善太夫組下役人五十名を引連れ、現場へ來て見ると彼方此方にマダ蠢動て居るもの、又全く絶命して居るもの等の死骸が彼是三十五六人もござります、ところが一人の大きな坊子が、錫杖を箆いて起つて居りますから。

善「之れ、其方は何者であるか」

此の時頼念は下村善太夫の前へ兩手を突き。

頼「左様でござります、私は是迄九州灘に於て海賊を働いて居りました夜及五郎頼念と申す者、只今大勢を殺しましたのは私でござります、依て今町

奉行所へ訴へ出でやうと思つて居りました所へ貴所の御出張でござります、最早私は逃げも隠れも致しませんから神妙にお繩を頂戴致します」

下村善太夫驚いた「此の坊主は海賊だと云ふ大變の奴もあればあるものだ」と頼念に繩を打つて岡山城中へ引揚げました。

さて此方はお話變つて武藏、源太郎の二人は岡山を立つて殿島明神へ参詣を致し是より周防の岩國は有名の錦帯橋を見物致します、此の錦帯橋は私も前年見に参つた事がござりますが、木橋では位好く出来て居る橋はござりませんさうで、只今では金のかゝりました鐵橋は幾らもござりますが、昔

は當今のやうに器械の作用も少なく左程美術が進んで居りません、然るに壯嚴緻密、堅牢、美術的に斯くの如き橋を拵へたと云ふのはナカク大したもの、折々西洋人などが錦帯橋を見物致しまして、日本と云ふ國は昔から餘程美術が進んで居る國であると云ふて、錦帯橋を見て褒めないものは無いさう

で、何しろ有名の錦帯橋之れを見物を致す、そこで是より兩人は豊前の小倉へ久し振にて立歸つて参ります、一同の門弟は武藏が歸つたと云ふので皆出迎を致します。

門「之れはく先生お歸りになりましたか、永らくの間御漫遊御無事にお歸りになりましたして寔に結構でございます、して先生が御同道に成りました、アノお方は何誰でございますか、武此人か、此者は拙者が大和路を漫遊致した折蓮正寺と云ふ寺に於て面會を致し其折門弟に致した阪崎源太郎と云ふものだ、門「左様でございますか。」

此處で武藏が源太郎を門弟に紹介せる。それから武藏は久方振にて小倉の城中に登城を致しまして小笠原右近將監殿に御目通りを致し、種々旅中の御物語など申上る、中にも武藏が長らくの間大和地方を廻り大和ノ國添上郡下榎木阪の重兵衛公の道場へ訪れ

て行き重兵衛公と真劍の勝負を致した事、並に播州沖に於て龍宮のお辰と云ふ海賊に出逢つてお辰を斬つた事等を主君へ申上ますと、右近將監殿には之れをお聴き遊ばして大に御感心遊ばさる、そこで其日は主君より致して御酒を頂き、武藏は面目を施して立ち歸りました、處が門弟衆のほうでは先生の武藏は久し振に歸つた事でありますから、皆稽古をして貰はうと思つて待つて居る、で武藏も一兩日経ちます内には道場へ出まして大勢に稽古を附けて居ります。

源太郎は外に用事も無い、退屈でござりますから毎日武藏が門弟に稽古を附けるのを道場で見て居る、すると或一日の事武藏が主君へお目通りを致さんと登城をして留守、道場では一同の門弟が各自に稽古をして居ります。

○「オイ、齋藤、齋何だ、アノ先生が大和から連れて来た源太郎と云ふ男は何だ、癪に障る男だな、齋何故、○「吾々が稽古をして居るのを見

ては何時もニヤ／＼笑つて居るぢやないか、實に失敬な奴だ、幾ら向うが技倆が出来るかは知らないが人の稽古をするのを見て笑うと云ふのは大にドウも失禮の奴、マダ年が若いから夫れ程に腕前も出来まい、今日は一番源太郎を道場へ引張出して小つびごく殿打つて遣らうぢやないか、齋宜からう」
そこで奥村幸之進と云ふ門弟が源太郎の前へ遣つて來ました。

幸「さて源太郎殿、今日は御承知の通り先生は御不在でござります、折角吾々は稽古に參つたものでござりますから是より歸るも残念ドウ、貴所に一本御稽古を願ひたいと思ひますが、如何でござります」
源太郎之れを聞いて。

源「夫れは折角のお頼みだが拙者は劍術を知りません、唯だ先生の門弟になつた許り、是れから先生に稽古をして頂かうと云ふ私でござります、貴所に稽古をするやうの腕前ではござりません、幸「併し源太郎殿、貴所は先達から吾

々が稽古をするのを見ては笑つて居らつしやるではござりませんか、技倆の出來ぬものが人の劍術を見て笑うと云ふ筈はござりません、ソंनाに御隠しなさらぬでも宜しうござります、確かに貴所は腕前が出來ると云ふ事、吾々は承知を致して居ります、兎に角一本ドウ御稽古を願ひます」
と、無理無法に源太郎を道場へ引張て來ました、で源太郎は「平素から門弟が乃公を馬鹿にするから今日は乃公の腕前を一つ見せて遣らう」と、口には言はないが夫れと心に覺悟を致し仕度を致して一同の門弟に向ひ。
源「折角貴所方の御勤めでござりますから一本立合を致します、一人二人は面倒であるから之れにお出での方々一度におかゝりなさいまし」
之れを聞いた門弟驚いた。

○一年も行かない辭に高慢な事を云ふ奴だ、夫れでは我々が打込で遣らう」と、居合せた門弟十四五人、各自に外竹の木刀を執りまして八方より致して源

太郎を取巻いて打ち込で参ります、然るに源太郎大勢を相手に致し、片端ふリポン／＼と打撲りました、遂々十四五人は源太郎の爲に皆打たれました、そこで一同は感心をした。

「成る程道が先生が大和から引張て来た丈の事はある、何て強い奴だらう、アンな強い奴に出會した事はない、先生だつて今まで十四五人を一度に相手に立合をした事はない、事に依ると先生よりも源太郎の方が腕前が出来るかも知れぬ」

門弟は大に感心をして居る所へ武藏が御殿から立ち歸つて來ましたから、「お歸り」門弟は其處へ出迎ひをする。

門「先生御歸りになりましたが、就ては先生に申し上げますが、今日先生の御留守中に源太郎殿に御稽古を受けましたが、實に連れの腕前大に吾々は感心を仕りました、そこで明日からは私共は源太郎殿に御稽古を願ひたい

と思ひますが如何でござりますか」

武藏は之れを聽いて心中に「ウー之れは源太郎が門弟に腕前を見せたから門弟が斯う云ふのだな」と、思ひましたから、武「ア、宜しい、其方等にはマダ申さぬが源太郎はナカ／＼の腕前だ、斯く云ふ武藏も源太郎の腕前には驚いて居る、然らば明日より源太郎に稽古をさせる事にするから……」

と、門弟は之れを聽いて大に喜んだ、是から武藏の代りに源太郎は一同の門弟を相手に日々稽古を致して居ります、さア皆門弟は方々へ行つては此の事を評判にする、門弟は武藏先生が今度大和ノ國から連れて來た阪崎源太郎と云ふものは天下無双の豪傑だ、年は若いが大した腕前だと云つて皆評判をして居りました。

然るに何時しか此事が小笠原右近將監殿のお耳に入りましたから、將監殿成日武藏をお招きに相成りまして、

將「武藏 武ハッ 將」其方が此度大和から連れて来た源太郎と云ふ若い者があるさうだが、家中の評判を聞いて見ると容易ならぬ所の彼れが腕前と云ふ事を承知を致して居る、一体彼れは何者であるか 武「恐れ乍ら申し上げませぬ、彼れは前年家斷絶に及びました最上出羽守の案老三萬五千石、阪崎甲斐守の遺兒、私先年大和地方を漫遊の際蓮正寺に於て門弟と致し、此度歸國の際同道を致しました 將「左様か夫れはナカ／＼の筋目正しきもの、彼れを明日同道を致すやうに」

と、是より武藏は道場へ立ち歸り源太郎に此の由を申し傳へる、源太郎之れを聽いて大に喜んで「右近將監殿にお目通りが出来るか」と喜んで居る、武藏は翌日源太郎を連れまして登城、小笠原右近將監殿御前に於て源太郎腕前を現はすと云ふお話を

〇七合入の盃で駈付け三杯とグツト飲んだ

さて武藏は源太郎を同道致しまして小笠原右近將監殿御前に出でます、此の時武藏より、

武「恐れながら此處へ召連れられましたのは阪崎源太郎と申しまする者、何卒御言葉の儀を願ひ奉る」

斯う言はぬと上より御言葉がからぬ内に此方から挨拶を致す事の出来ぬのが法でござりますから、そこで源太郎は唯だお辭儀を致して居る、此の折小笠原右近將監殿は、

將「其方も阪崎源太郎と申すか、余は小笠原右近將監であるぞ見知り置け」と、被仰つた、此の時源太郎

源「恐れ入ります、私は阪崎源太郎と申します、以後御見知り置き下さり

まするやうに」と、御挨拶を申上る。
此時一家中の者は武藏が連れて来た阪崎源太郎と云ふ人物はドンな男りと皆源太郎の様子を見て居ります、何しろ元は三萬五千石阪崎甲斐守の伴源太郎人品と云ひ、骨格と云ひ大したもので腕前もドウも出来さうに思はれます、此の折右近將監殿は、

將「之れ源太郎、其方は酒を飲むか、源「左様でござります、澤山は頂戴致しません、少々位は頂戴を致します、將「左様か、然らば只今余が其方へ杯を取らず、之れ杯を持つて、盃を……」と、被仰つた。

即て夫れへお盃を持つて参りました、七合入の大盃、右近將監殿は右の盃をお手に取り遊ばし満々と注がしてアツを一杯召上り、

將「さア源太郎、之れを遣はす」と、被仰つてお盃を下さる。
武藏は傍に見て居て驚いた「コンな大きな盃を源太郎頂戴を致して宜い儘

梅に飲み乾せば宜いが、若し飲めない時には上へ對して恐れ入る」
すると源太郎は右七合入の御盃を頂戴して満々と注がせて忽ちの間に飲み乾し、盃を返すかと思ふと。

源「恐れながら申し上げます、誠に結構の御酒でござります、併し初まり一杯は酒の味が十分に分りません、今一献重れて頂戴を致します」
殿様驚いた「年は若いナカクドウも飲む奴だ」と思つて、

將「之れく苦しうない何杯でも飲め」
源太郎大に喜んで二度目の七合入の杯を亦た満々と注して是れも忽ちの間に飲み乾して仕舞ひます、今度は盃を返すだらうと思つて居ると、

源「アイや恐れ乍ら申し上げます、駈け着け三杯と云ふ事があります、モウ一献頂戴を致します。
殿様驚いた「ナカク飲める奴だ」

武藏も呆れた「此奴何時コンなに酒を呑み覺へたらう、乃公と一所に歩く間は唯た一本が二本であつたが不思議の奴だ、併し御前体不都合の事がなければ宜いが」

と、呆れる内にも大いに心配をして居ました。

すると三杯目の杯を滿々と注がせて源太郎、亦た之れも忽ちに飲み乾します。酒杯洗をして源太郎、

源「恐れ乍ら御返杯を仕ります 將「リム、適れなる手の内、苦しうない

盃を此處へ持つて參れ」と、被仰つた、右近將監殿、

將「源太郎、其方へ余が着を致して遣はす」

豫て懷ろに入れてお在になりました和泉守兼定の小刀を取るより早く源太郎を望んでヤツ……と云ふて投げ付けた、源太郎の面上に此の小刀が飛で參るのを源太郎ヒヨイと身を轉し兩手を以て右の小刀を受け止めます、

源「之れはく何より結構の御肴、源太郎有難く頂戴を致しました」と、懷中へ小刀を入れて了つた。

殿様も驚いて了つた、遂々小刀一本取られて了つた、そこで一同の者は源太郎の腕前に感心を致した、然るに武藏は源太郎に向ひ、

武「最早御目通り相濟んだに依つて御暇を頂戴しやう」と是より殿へ對して御暇乞を致す。

そこで兩人は今御前を退りまして御次の間へ參りますと大きな御掩障がござります、此の掩障の前を通らうとする小笠原の藩中に於て古今無双の大方と言はれた澤村甚太郎と云ふ者が豫て殿より申付つて源太郎の腕前を試さうと云ふので赤檜の木劍を執り隠れて居ります。

斯くとは知らず源太郎今お掩障の前を通らうとする所を突、然背後より致し、してヤツ……と云ふて源太郎へ打込で參りました、源太郎は正可御殿の内に

斯様なものが隠れて居るとは神ならぬ身の知らないのであります、今澤村が打込で来た木劍「心得たり」とあつて源太郎を轉じ、突然木劍の先をウツと握みます、澤村甚太郎「失策た」と思ふて木劍を引かうとしたが、ナカく木劍が引けません、其力と云ふものは實に遠がの澤村甚太郎も驚いた「何と云ふ力のある奴だらう」力に任してウツと、幾ら引いても喫とも致しません、そこで双方木劍を引合つて居る間に木劍の中央からメリメリと云ふと終に木劍がホキリと折れます、思はず兩名タヤクと後方へ下りました、實に大した力でござります。

木劍を折るなんかと云ふは夫れは大勢の力なら折れませうが、二人も真中から引折るなどと云ふは實に普通の方ではござりません、實に怪力と云ふのもござりませうか、殿を首めと致して一同、兩人の力を見て御感心遊ばす、そこで源太郎は其儘武藏と同道を致して屋敷へ立ち歸りました。

〇十三ヶ月目に出産

然るに茲に肥後國は飽託の郡、淀村、新田に於て、八千石を領して居る金森右近清定と云ふ豪傑がござります、此人は細川家の家臣と云ふ名義になつて居りますが、其の實加藤清正公の御妾腹に出来ましたお方、殊に大力無双の勇士、劍術は真陰一刀の兩流に亘つて居る、これが宮本武藏の伯父さんに當る人でござります。

此の金森右近清定と云ふ人は、慶長十三年秀頼公の下へ關東の徳川將軍より使者が参りまして、其の次第は此度、後水尾天皇御即位の式を擧げ給ふに就き御慶賀の爲に上京せらるべし、余も直ちに上京を致すと云ふ事と云ふ事承ります、所が大阪方に於ては豫て徳川家康に謀叛の志があると云ふ事を承知致して居りますから、之れは家康が秀頼公の若年を侮り上京をさせ、

少しの落度があれば夫れを口實に豊臣家を滅ぼさうと云ふ奸計に相違ない、し
て見れば迂濶に上京は出来ません、依て大阪城中に於ては御病氣と云ふ事に
相成ります。

然るに此の時加藤主計頭清正席を進み出で、清「苟且にも天皇陛下御位
に即かせ給へる大切なる御慶賀の折柄御上京に相成らぬは却つて世間の譏
を招く道理、之れは是非御上京遊ばざる方宜しうござります、譬ひ關東將軍
如何なる奸計を施すと雖も、此の清正が御供致し候上は萬一君に對し害を
加へなば、清正其場に於て家康の白髪首を引抜き、君の御身の上必ずや過
ちなからざるやう仕り候、御安神遊ばされて、御上京の程を御勧め申
し奉ります」そこで一同の者は清正の意見に従ひまして、御上京と云ふ事に
決定を致しました、さて御供の面々には加藤主計頭清正、片桐市正且
元を首めとして一萬餘人の御同勢京都へ御着に相成る、陛下に咫尺致し龍顔を

拜し奉り、御祝賀を申し上げ二條の城に御立ち歸りに相成りました。

然るに徳川家康之れでは手の着けやうがござりません、何とかして秀頼を無
き者にしやうとイロく工夫を凝しましたが何分にも秀頼公の側には有名の
加藤清正並に片桐且元の兩名が控へて居りますから、ドウしても邪魔にな
つて仕方が無い、依て清正と且元の兩人さへ亡きものにして了つたなら、
秀頼を失ふのは雑作はないと、更に家康工夫を凝し、天皇陛下よりの賜物
であると饅頭を下さりました。

清正公は其場に於て饅頭を喰へました、即ち此の饅頭の中には恐るべき毒藥
が入つて居ります、一説には清正公は之れを知らないで饅頭を喰へたと云ふ
が、之れは決してさうでは無い、只今に至るまでも一社の神に祀らるゝ程の非
凡の豪傑、清正公が知らない氣遣ひはござりません、之れは此の場合に於て
喰へないと云ふ譯には參りませんから、毒が入つて居るのを承知をして清正

公は召上りました。

片桐は偶と気が着いたものか、用心を致して喰べた振を致して其の饅頭を懐中に納め、我屋敷に立ち歸ります、そこでドウも此の饅頭が怪しいと云ふので典薬吉田源哲に申し付け、饅頭の検査を致します、果して毒薬が入つて居ります、依て且元は、大に驚いて關東の方角をハツと睨み、

且、汝れ家康、能くも吾々、武夫を毒を以て殺さんと致す卑怯の振舞、無程に目に物見せて呉ん」と、大に立腹を致しました。

且、併し幸ひにして乃公は此の奇難を遁れたが氣の毒なるは清正である、其場に於て知らずに喰べたが實に豊臣家第一の忠臣を失ひしは天なり命なり」と、大に片桐落膽を致しました、そこで片桐は清正に之れを知らせやうと云ふので、直ちに馬に乗つて清正の屋敷に参りまして清正に面會を致し、

且、實は之れ、斯う云ふ、今の饅頭の中には毒薬が入つて居る事をば發見を致した、實に尊公は御氣の毒の事を致した」と、涙を溢して話を致します。

此の時、清正片桐の厚意を謝し、
清「夫れでは尊公は已に検査を致されたか、如何にも我れは食した、ア、豊臣の天下も是迄なり、百たび、千たび悔ゆとも六日の菖蒲、十日の菊、吾れなき後は片桐氏其許軍師保母の役目を引受け、關東の軍勢を向ふへ廻し、花々しき戦ひをなし、豊臣の天下を輔佐して呉れ、又御身相談相手が欲しければ、紀州和歌山の東に當つて高野山の麓に眞田左衛門尉幸村と云ふものか閑居致し居るから、之れを頼んで軍師となし、其許は秀頼公の柱となり、御奉公を致して呉れ、之れが此世の別れである」と、清正涙を溢し別れを告げ、テ清正公は熊本の城へ立ち歸ります、併し

古今稀なる大豪傑の人でござりますから、直には死ません、其後三年後に即ち慶長十六年六月二十四日に至つて漸く毒薬が廻つて参りました、之れは決して怪しむには足りません、人と云ふものは勇氣盛んの時には少々ぐらゐの毒を呑だからと云ふてさう直に死ぬものではござりません、一例を申して見ると物を喰べても胃の悪い人は直に物に中ります、胃の強壯の人は些つと位物を餘計に喰べても身に障りません、して見れば毒を呑だからと云つて、身軀壯健に致し勇氣盛んであつたならば随分三年ぐらゐ保つやうな事があるかも知れませんが、何しろ相手は吾々と違ひ有名の清正公の事でござりますから、けれども一旦呑だ毒ば之れは消滅する氣遣ひは無い、遅かれ早かれ必ず之れは廻つて來るに相違ござりません。

そこで清正公は佛師を招き自分の像を刻ませ、御身には黒糸緘の大錠、長さ三尺の堅烏帽子を冠り、右梵天の素袍、法華經二十八本、一部八卷、六

萬九千有餘字を取り兜の鉢金に彫り納め、背には南無妙法蓮華經の七字の題目を書き現はしました、旗指物は四尺に餘る金純子の刺繡したる、左の御手には臥龍丸と名くる穂の長さ三尺五寸、石突まで一丈二尺の片鎌鎧、右の御手には金鑊めの采配をお執り遊ばし、東に向つて莞爾と、五重の蒲團の上で死亡致されました、實に古今無双の豪傑でござります。

然るに清正公が御生前に家臣森本儀太夫の娘にさよと云ふがござりましたが之れへ御手を御附けになりました、之れは如何なる勇士豪傑と雖も此の色情の道ばかりは別なものでござります、でさよは清正公の御胤を宿しまして懷妊を致します、或日清正公さよに向はせられ、

清其方の腹の子供が男子であわし名乗つて出るやうに、又女子であれば其方の心任せに致すやうに、

と、七尾丸の御短刀を下さいました、之れは身に七つの星が現はれて居ります

夫れ故之れを七星丸と稱へる、ア此の御短刀を頂いて懐妊して居つては何かの御用も勤まりませんから、さよは宿許へ下つて参りました、之れは外の事とは違つて隠して居る譯には不可せんから、父森本儀太夫に實は殿様の御手が附いて之れく斯うと話を致しました。

森本儀太夫も相手が御主人だからドウも致し方がござりません、ソコで軀を大切に分娩月を待つて居りましたが、さア十月経つても生れませんが、十一箇月経つても生れない、十二箇月経つても生れない、不思議の事もあればあるものだ併し斯う云ふ例は幾らもござります、辨慶は母の胎内に在る事三年、楠正成公は母の胎内に七年居つたさうでござります、又唐士の老子と云ふ人は生れた時が七十三であつて、助産婆さんよりは年が三つ上だつたと云ふ、寔に妙な子供もあればあるもので、して見れば和漢兩朝に随分昔より斯う云ふ不思議の事は幾らもござりました。

ところがおさよは十三箇月目になつて初めて出産を致しましたのが、玉を欺くやうな御男子、名前を鐵丸と命名しました、其内に清正公は御逝去に成り御子息忠廣公の御世となりましたが、子は必ずしも親に似ぬもの、此の忠廣公は清正公とも云へるお方の御子息には似合はぬ闇愚の君でござります、後に至りて御家斷絶と云ふ事に成りました、實に情けない事でござります。

さておさよは或人の勧めに依りまして鐵丸を連れて淀村新田に於て八千石金森源太左衛門と云ふ人の所へ再縁を致す事に相成ります、幸ひ源太左衛門に子供が無き所より鐵丸を相續人に致す、其名を金森右近清定と改めます、宮本武藏の實父吉岡太郎左衛門の妹でおふでと云ふものを女房に貰ひます。

然るに夫婦の中に一人の女の子が出来ます、名前を芳江と申します、當年十八歳に相成ます、天然の美人、女ながらに武勇を好みます、子供の中から父右近

より劍術を習ひまして今では女子とは申せ天晴の腕前、家中の者は誰一人として芳江に勝つものはいざりません、遺がは金森右近清定の娘でござります。

〇病氣の元は

或時の事武藏は暫らく叔父さんに逢はないから久し振にて源太郎と同道を致して肥後の淀川新田へ参ります、そこで右近清定に面會を致し、

武之れはく叔父上、久方振にて御目通を致す、例時ながら御機嫌宜しうござりますか、清オ、武藏であるか、暫らく逢はなかつたがマア、御互に無事で結構、して其の同道をした其の若い人は何者か、武左様でござります、之れは私が前年大和地方を漫遊致した時に、大和の蓮正寺と云ふ寺で門弟に致しました阪崎源太郎と申す者であります、何分共に御見知り置かれまして御引立の程を願ひます。

ア源太郎は武藏の叔父さんでござりますから、

源之れはく初めまして御目通り致します、私には武藏先生の門弟阪崎源太郎と申します者、以後御見知り置かれまして宜しく御眷顧の程を願ひます。

此時に右近が源太郎を見ると眉目清秀、頗る美男子でござります、遺がは三萬五千石の家の倅、實に立派なものでござります、すると何思ひけん右近は娘の芳江を其處へ招て源太郎に紹介を致します。

右「ア、之れく芳江、芳、ハイ、右幸ひに武藏が参られた、此の源太郎と云ふ男は大分腕前が出来るさうだ、今日お前と一本立合を致して見たらドウか」

源太郎之れを聞いて驚いた、随分亂暴の人であればあるもの、マダ先生が何とも被仰らないのに乃公の腕前が出来るさうだとは酷ひ、夫れは勿論乃公は出

来る、併し相手は高の知れた女、打ち込むのは何でも無いが向ふは先生の叔父さんの娘だ、打ん殴るも氣の毒、さうかと云つて此方が負たら見つともない、之れは勝つても負ても詰らぬ立合だ、と源太郎大に迷惑を致して居る、所が武藏は、

武之れく源太郎折角叔父上の思召であるから、一本立合を致して見る、芳江殿は女ながらも細川家に於ては有名の腕前、其方氣を着けて立合を致すやうに」

源太郎は腹の中で 源なアに幾ら腕前が出来た所で高の知れた女だ、ドレ程の事があるか」

と、是より兩人は道場へ出ます、源太郎は武藏から習ひ覺へたる二刀流、二本の木劍を取つて向ひます、此方は女の事でござりますから、稽古難刀を取つて其處へ出ます、双方互にエイ……ヤツ……と云ふ氣合を掛けて立合う、

傍には金森右近、宮本武藏が見物を致して居る、此折源太郎は芳江の腕前を見ると、成程父右近が自慢の程あり、夫ればナカク大した腕前でござります、併し逆も源太郎の腕前に及びますまい。

双方氣合を入れて居る間に、ヤツ……と源太郎芳江を打ち込んで参ります、心得たりと芳江は難刀を取つて丁々、車斬、十文字、大袈裟、小袈裟、空竹割の難刀の秘術を盡して打込ます、其の早業實に飛鳥の如くでござります、暫らくの間、源太郎は芳江の打込む難刀を左右に拂つて居りましたが、即ち隙があつたかヤツ……と云ふと手許へ飛込で来た源太郎木劍を以て芳江の肩口をボンと軽く打つた、何しろ女だから軽く源太郎遣つて呉れば可いかなと先刻來瞳を据へて見て居た武藏も此の様を見て「ア、宜かつた」とホツと一息吐く、芳江は難刀を其處へ投げ出し後方に下りまして、

芳参りました、寔に恐れ入ります」

初めて源太郎の腕前を見て金森右近膝を打つて感心致す。
右「武藏、實に此の若者は通れの手の内余も感心致した、道がドウも御身が門弟と致した丈の事がある。

そこで金森右近は武藏、源太郎に對して大した御馳走をした、兩人は二三日滞在を致して是より豊前小倉に立ち歸る事に成りました。

然るに右近清定の娘芳江は初めて源太郎に逢つて立合を致して見た所が實にドウして敵はない通晴の腕前、ドウぞ私が一生添うなら腕前と云ひ、纏綴と云ひ、ア、云ふ方をと、是が爲に源太郎を見初めました、所謂神経病、戀煩ひ、体も段々と衰弱を致して工合が悪くなります。

右近清定は夫れとは氣が付きませんが、何分にも一人娘の事であるし、母親は三年前に亡くなりまして今では親一人、子一人、ドウか娘の病氣を治したいとイロ／＼心配を致して醫者に掛けて様子を見せたが別に之れと云ふ病は無い

さア薩張右近には分りません、そこで右近が考へたのは「ハ、一之れは年頃の娘であるに依つて、大方戀煩ひでもして居るのでは無いか、之れは如何さま醫者の藥では利かない、此の病氣許りは醫者の力では全快をしまい」とそこで乳母のお徳と云ふものを招で、

右「實は娘も斯く々々、斯う云ふ病氣、ドウも通常の病氣では無いやうに思ふから其方が娘の了簡を聽いて見て呉れ」

乳母のお徳は委細を長り芳江の所へ行つて段々話を聽いて見ると芳江も終に隠す事が出来ませんで「實は源太郎様を見初て、之れ／＼斯う」と話を致しました、之れを聽いて初めてお徳は安心を致し、早速金森右近の許へ来て、

徳「お嬢さんの病氣は斯様々々でござります」
と、話を致す、右近清定之れを聽いて。

右成る程之れは尤もだ、アノ位の男だから娘が戀煩ひをするのは
 当たり前だ」
 子に甘いのは親心、ドウか折角娘が思ひ初めた男であるから源太郎を養子
 に貰ひたい、併し之れは武藏が呉るか呉ないか分らない、兎に角一つ之れは小
 倉へ参つて武藏に面會し致してドウでも斯うでも養子に貰ひ受けんと遂に右近
 清定は豊前小倉を指して遣つて参ります。

○彼れは泥棒の子

さて金森右近清定は娘の養子に源太郎を貰うて來やうと淀川新田を出
 立致します、子に甘きは親心況して一人娘の事でござりますから、ドウか
 源太郎を養子に貰ひたいと思ひますが、併し武藏が得心するかしないか分りま
 せん、テ右近は兎に角武藏に面會をして相談をしやうと小倉へ参りましたが其

途中フツと考へた、之れは武藏より第一に小笠原右近將監殿へ御目通りをし
 て一つ源太郎の事を願つて見やうと考へたから、先づ右近將監殿へ御目通り
 を願ひます。

金森右近と云ふ人は御承知の通り細川家の客分同様細川の家來と云ふ譯で
 はござりません、固より筋目正しき清正公の血統でござりますれば、右近將
 監殿も金森右近が参つたと云ふので早速御目通りに御招きに相成ます、此折
 右近清定は、

右之れは久方振にて清定御目通りを致します、例時ながら御機嫌の
 体を拜して恐悦に存じ奉ります、將、オ、其方は清定であるか、暫らく面會を
 致さぬ、此度小倉へ参つたのは何か用事でもあつて参つたか、右左様でござ
 ります、甚だ異な事を申上るやうでござりますが、先般武藏が大和より連れ
 て参りました阪崎源太郎と云ふ者がござります、ドウか源太郎を娘の養子

に致したいと思ひます、此儀を一つ御承知を願ひたいと心得まして御願に罷り出ました、將「夫れは余の考へにはいかぬ、何か承れば武藏が養子にてもするやうに聞いて居る、之れは余が許しても武藏が得心をしなければ逆も話には六ヶしからう、右「御意にござります、上からお許しがござりますれば、武藏と私とは御承知の通り叔父甥の間、括でござりますから、譬ひ武藏が何と申したりと私から掛合を致します、源太郎を養子にして苦しうないと云ふ、ドウウ御言葉をお願います」

右近將「監殿も仕方が無いから、將「其儀は決して余に於ては差支は無、其方の勝手に致すやう、右「然らばドウウ私に御書きものを頂戴致したうござります、將「オ、夫れはドウ云ふ書きものを遣るのか、右「左様でござります、源太郎は其方の願ひに依つて養子に致して苦しうないと云ふ御書付を一本頂きたうござります。」

右近將「監殿驚いた、ソナナごうも書付を出しては武藏に對して寔に悪いと思召したが、外ならぬ金森右近の頼みでござりますから、據るなく書付を書いて御渡しになります。」

そこで右近は喜んだ、此の書付を持って居る以上は、譬ひ武藏が何と言はうと是非養子に貰はうと云ふのは是より御前を下りまして武藏の屋敷へ遣つて参ります、取次を以て武藏に此の事を申し入れる、肥後から叔父上がお出になつたので武藏は玄關の式臺に出迎へを致す。

武「是れはく叔父上でござりますか、遠路の所を能うこそ御入來、さアどうぞ此方へ、右「オ、武藏が先日は寔に失禮致した、今日は其方へ對し折入つて頼みたい事があつて罷越した、武「ア、左様でござりまするか、何は兎もあれ此方へ」と、云ふのは是より右近を奥の座敷に案内を致します武「して叔父上私にお頼みとは如何の次第でござりますか、右「されば外でも無

い其方の所に居る阪崎源太郎、實は娘の芳江が源太郎に戀煩ひを致し、捨て置けば生命にかゝる事になる、依てドウか源太郎を娘の聲に致したいと思ふ、已に先般源太郎の腕前を見たが、若年とは申し乍ら適れの腕前、金森右近の養子として恥かしからぬ所の人物である、何うか一つ武藏、源太郎を是非共余が養子に貰ひたいものであるが、何と承知を致して呉る譯には行くまいか」

武藏は驚いた、これは大變な事を頼まれたと思つて、事に依れば自分の養子にしやうと云ふ源太郎、併し叔父から頼まれて見れば正可厭と云ふ譯にも参りませんから、

武「左様でござります、之れは私が勝手に源太郎を差上ると云ふ譯には参りません、と云ふのは主君から致しまして二百石の御賄料を頂戴致して居ります、して見れば私の一了簡で承知すると云ふ次第には参りません、孰

れ主君へ伺つて其上御返事を致します」

右近腹の中で大抵斯う云ふだらうと思つたから、先きに右近將監殿より書付を頂いて來たのだ。

右「之れく武藏、其儀は決して心配をするな、其の方承知をすれば主君に於ては決して御構ひはない、實は只今主君から致して斯くなる御書付を頂いて來たのだ、武藏之れを見よ」武藏驚いた「手廻しの宜い人もあればあるものだ」

主君様から斯う云ふ書付を貰つて來ては武藏も仕やうがない。

武「然らば主君は御承知でござりますか、右「固より小笠原家に於ては御承知あればこそ此通り書付を下すつた」

で武藏は通常の事ではいかぬと思つたから、

武「折角でござりますが夫ればドウも些つと六ヶしうござります、堂々たる

所の金森家の養子と云ふ事は些とドウも之れば不都合でござります 右、夫れはドウ云ふ譯で不都合だ 武、左様でござります、彼れは泥坊の子でござります

右近清定之れを聞いて驚いた、

右、なに源太郎が盗賊の伴とはドウ云ふ譯だ 武、左様でござります、彼れの素性は寔に正しきもの、先般申上まする通り最上出羽守の家老三萬五千石を取つて居りました阪崎甲斐守の遺兒、系統は宜しうござりますか、生立が悪いのでござります、何ぞと申しますると彼れは生れました時より大和國蓮正寺の住職、其實は夜又五郎頼念と云ふ盗賊に育てられました者で依てドウも左様なものを貴所の養子に遊ばしては御家名に係りは致さぬかと思ひます

すると清定は 清、夫れは武藏差支は無い、今日人として賊心の無いもの

は一人も無い、凡そ此の世に生れたものは上、將軍を首め大名、旗本、町人、百姓に至るまで皆賊心がある、何ぞと云ふに將軍は將軍で、我日本許りでは足りないから、運長くば外國まで我領分にしやうと思ふ、之れは即ち賊心では無いが、又大名は彼の城を取り、此の大名を滅し、我領分に取込まんと思ふ之れ、即ち賊心、已に關白秀吉公は其身土民より起り、三州矢矧の橋に於て蜂須賀小六正勝と云ふ盗賊に出逢ひ、時に蜂須賀の乾兒となり、後に松下嘉平次之綱の家來となり、然るに富士川に於て伊藤日向守を打ち取り、夫れより追々出世を致し、終に關白太政大臣と相成つた、又蜂須賀小六は秀吉の引立に依り阿波國名東郡徳島に於て二十四萬石の大名と相成つたでは無いが、又手下となつて居た稻田大八は淡路洲本に於て六萬石の城主となつた、然らば賊心のあるやうな者でなければ出世は出来ぬ

武藏は之れには驚いた、斯う云ふたら向ふが止めるだらうと思つたら大違ひ、

そこで武藏は據るないから、

武「夫れ程までに源太郎を御懇望でござりますなら、宛に角一つ當人を喚で話を致しませう、之れは私が承知を致しても、當人が厭と申せば致し方ござりません、有、夫れは如何にも尤もの事だ、けれど本人とてもさう申しては何だか、家閥と云ひ、娘も別嬪であるし、豈夫や厭とは云ふまい」

そこで武藏が源太郎を呼で斯様々々、爾々であるあと話をすると源太郎、

源「私のやうなものを然程までに思召て下さるなら決して私差支はござりません」

清定大に喜んで堅く貰うと云ふ約束を致しまして國許へ立ち歸ります、テ娘の芳江に此話を致すと、芳江はモトく源太郎を貰ひたさに病氣に罹つたのでありますから、此話を聴くと忽ちの間に戀煩ひ全快と云ふ事になつた、外の病氣と違つて正直の病もあればあるものでござります。

〇殺生禁斷の場所を鶴を目がけてズドン

阪崎源太郎はいよく吉日を選んで金森家の養子と相成つて儀式も目出たく住の江の、松吹く風の音高く、群來る千鳥、鶯宿梅、借老の契、愈々結婚成立と云ふ事になつた、テ此事を細川越中守殿へ御届に及びます、或日越中守殿から金森右近へ對し「養子源太郎同道を致し出頭をするやうに」と、云ふ御沙汰。

夫れで清定は源太郎を同道して主君へ御目通りをします、今日の御挨拶を申上る、此時家中一同の者は其處に居並んで。

「矢張好い所へは好い養子が來る、金森家は寔にドウも仕合せだ、年も若く風采も好い、ア、云ふ豪傑を養子にすると云ふのは寔に羨しい」

と、云ふので一同のものは源太郎の顔を見て居る、細川越中守殿は豫て源

太尉の腕前の出来ると云ふ事は御承知でござります、併し其の腕前を御覽に成つた事は無い、そこで細川家に於ては有名の劍客者十六人と云ふものに源太郎の腕前試験の事を申付ました、固より源太郎は武藏より習ひ覺へたる神免二刀流の秘術を以て忽ちの間に十六人の豪傑を打ち込みました、越中守殿を初めとして一同の者源太郎の腕前に感心を致しました、其日は御前に於て源太郎は御酒を頂戴致し面目を施して屋敷へ立戻つて参ります、然るに茲に一つの騒動が起つたと云ふのは、河尻の陣屋三萬石細川の御分家で細川若狭守と云ふ御方がござります、此の若狭守の伴に仙之助と云ふものがある、此の仙之助と云ふ者が大名の育ちには珍らしい放蕩無頼の人でござります、常に亂暴を致して仕やうがござりません、けれども彼れは御分家の若殿でござりますからして、誰一人と致して彼是申すものはござりません、然るに此の仙之助が芳江に大層に思ひを掛けて居りました。

そこで仙之助は金森家に對して縁談を申込だ事があるが、ドウか養子に成りたいと、三萬五千石の家から八千石の金森家の養子に行きたいと云ふ。然るに金森右近は成る程身分は三萬五千石の大名でも當人が氣に入りませんから、縁談を斷はつた、夫れが爲に大に仙之助は金森右近を恨んで居ります。すると或日の事、仙之助、加藤家の重寶髷題目の御旗を埋めた森がある、石の玉垣で包んである、之れは殺生禁斷の場所、只今でも宮内省の御料地と云ふやうなものがござります、其の御料地の附近に於て銃獵をする事は許してござりません、昔は殺生禁斷の場所と云ふものが幾らもござりました、阿漕が浦の平治と云ふものが殺生禁斷の場所に網を入れて夫れが爲に死罪になつたと云ふ事がござります。

そこで仙之助此の杉田の森に通るかゝると遙か向ふの松の木の上に何か白いものが載つて居る、見ると一羽の鶴が松の木の上に羽伸びをして居る、今では日

本に鶴と云ふやうなもの、殆ど無くなつて了ひましたが、徳川の盛んの頃には將軍家が鶴の御成と申して、時々、鶴を狩りに入らつしやいます、其頃には日本に鶴が大分居たんでござりますが、近頃では薩張り分りません、私が或人に聴いて見たに朝鮮の方へ皆行つて了つたさうで、只今では朝鮮附近には鶴が澤山に居るさうでござります、今では日本で鶴を見たいと云ふた所で滅多に居りません、そこで仙之助は此の鶴を見て、

仙「ハ、彼處に鶴が居る、可し一番彼の鶴を打ち取つて遣らう」

併し高い所に載つて居る鶴だから飛道具がなければ到底打ち取る事は出来ませぬ、仙之助屋敷へ立ち歸り、種ヶ島の短銃を持つて杉田の森へ遣つて来て十分に玉込を致し鶴を望んで一發ズドンと撃ちますと、狙ひ違はず鶴の横腹を撃抜きましたから、鶴は松の木からバラ／＼と落ちて参ります。然るに丁度此の杉田の森を通りかゝりましたは、淀川新田の百姓庄屋徳右衛

門の伴徳太郎、次郎吉と云ふ兄弟が、今森の中を通らうとするとズドン……と云ふ鐵砲の音、兄弟は之れを聴いて驚いた、弟の次郎吉

次「若しく兄さん、徳何だ、次「今のは確かに鐵砲の音ではござりませぬ、此邊は殺生禁斷の場所ではござりますが、誰も鐵砲を打つ者はありません

まい、誰が鐵砲を打つたんでござりませう」と、言つて居る。其處の所へ白いものが落ちて参ります、見ると一羽の鶴血だらけになつて落ちて来たから徳太郎、次郎吉の二人は喫驚致し、

徳「之れ、次郎吉、誰が鐵砲で鶴を打つた奴がある、怪しからぬ奴があるものだ、此邊は殺生禁斷の場所、御領主さへも殺生をする事の出来ない大切の場所だ、誰かアんな亂暴の事をしたらう」

と、向ふを見ると細川仙之助短銃を持つてヌ／＼遣つて参りました、是れを見て徳太郎、次郎吉の二人は、

して見れば今の鐵砲は仙之助様が鶴を御打ちになつたに違ひない、何ほ御分家の若殿でも殺生禁斷の場所へ入つて打ち取るとは餘り亂暴だ、是れは淀川新田の金森の主君様の所へ注進をしよう」と、淀川指して徳太郎स्ताくと駈け出しました、之れを見て仙之助「南無三是れは一大事」と、此事を注進をされては自分の身の上に係りますから、今駈けて参ります徳太郎の背後より、短銃を取つて終に徳太郎を其場へ撃ち倒しました、弟の次郎吉是れを見て、

次「是れは大變」と、廻り道を致してトットと此場を逃げ出しました。そこで淀川新田の金森右近の屋敷へ遣つて参り支那へいゝつて、

次「御願ひ申します 取次「ドレ」一人の若侍其處へ出まして 取次「何だ 次「私は御領分の百姓徳右衛門の 伴次郎吉と云ふものでありますが、只今杉田の森に於きまして、御分家の若殿様が鶴を御打ちになりました、

夫れに就き兄が當御邸へ御注進申さんと駈け出した背後より又一發遂々兄は仙之助様の爲に打ち殺されました、ドウか主君様へ宜しく此事の御取次を願ひます、

若侍より金森右近に此事を申し入れると金森右近之れを聽いて大に驚いた、

右「怪しからぬ奴は細川仙之助、豫て之れは寔に亂暴の事を致し家中のものを蔑るに、人も無げなる振舞を致し居る、彼れが身分は兎に角殺生禁斷の場所に於て發砲を致し鶴を打ち取るなどと云ふは言語同斷の至り、イザ拙者が参つて仙之助を打ち懲して遣る」と云ふので、樞に架けてあつた天九郎兼長の鎗を小脇に掻い込み、其儘次郎吉を案内に杉田の森へ遣つて参りました。

此の時に養子の源太郎が居りましたならば斯様な事は無かつたのでござりませ

うが、生憎源太郎は三里もありません所へ用事があつて参りまして留守中、娘の芳江は奥の坐敷で何れ用事を致して居ります、だから阿父さんが黙つて屋敷を出た事は芳江は知りません。

そこで右近清定、今杉田の森へ来て見ると、マダ細川仙之助が居ります、此折金森右近は、

右之れば、細川仙之助殿でござるか、警ひ御分家たりと雖も殺生禁断の場所に立ち入り發砲に及ぶとは不埒至極、外の役人等は兎に角此の金森右近は此儘許して遣る譯には相成らぬ」

と、持つた居た二間柄の鎗を取つて仙之助に突いて掛りました、金森右近と云ふ人は前回にも申した通り眞影、一刀の兩流に亘つた豪傑でござります、逆も眞劍勝負をした所で仙之助の及ぶ氣遣ひはござりません、最早仙之助は是迄であると思ひましたか、後方の方に下り持つて居りました短銃を取り突然金

森右近を望んで發砲致します、如何なる勇士豪傑でも飛道具には敵ひませんアツ……と云ふ間もあらばこそ右近清定の胸板を撃ち貫き、アツと魂切る聲もる共に一發の下に非業の最期を遂げました、之れを傍に見て居りました次郎吉、

次「南無三、是れは一大事」と行かうとする所を、後より追ひ掛けて参りました仙之助、

仙「汝、能くも乃公の事を金森の所へ注進を致したな、汝の生命は細川仙之助が貰つた、覺悟をしる」

と、可愛想にも次郎吉の後ろから抜打に一刀を浴せた、何條以て耐りませうや終に次郎吉は仙之助の爲に斬殺されました、終に三人の者を殺して細川仙之助其儘悠々と屋敷へ立ち歸つて仕舞ました。

〇悪人が善人で善人が悪人

此方は金森源太郎屋敷へ立ち歸つて参ります、妻の芳江が其處に出まして、
若貴方、御歸りでございますか、源、オ、只今立ち歸つた、御父上は何
方に居らしやる、若、左様でございます、何れへ行らつしやいましたかお坐敷
には御出が無いやうでございます。

そこで何うも様子が可笑いとは思つて居りましたが、未だ父が打ち殺された
と云ふ事は源太郎、芳江も氣が着きません、所へ慌ただしく玄關へ對し一人
の百姓、

「百、只今、杉田の森に於て御當家の殿様が何者の爲とも知れず鐵砲に打たれ
て殺されました」
と云つて注進を致して来た、是れを聽いて源太郎、芳江の二人は大に驚き、

取る者も取敢ず、杉田の森へ来て見ると此は如何に養父右近は鐵砲傷を受け
て血浴れになつて其場に倒れて居ります、傍らを見ると徳右衛門の伴、徳太郎
が鐵砲で是れも打たれて居る、遙か向ふの所には弟の次郎吉も殺されて居
る、此折源太郎、芳江は父の死骸に奴付いて、

源、之れは仕たりお父上、貴方は何者の爲に斯様の非業の最期を御遂げ遊ば
したか、私が屋敷に居りましたなら、斯様な事はあるまいものを……」

と、暫らくの間、兩人は涙を溢し泣いて見たが致し方がござりません、する
と此方は庄屋徳右衛門、伴、兩人が出た限り歸つて参りませんから、心配を致
し今此處へ来て見ると、此の始末、死骸を見た時に徳右衛門大に驚きまして、

徳「一体何者が伴を殺したんだらう」
と、兩人の死骸に取附いてワア〜と云ふて徳右衛門泣いて居ります、之れを
見て源太郎氣の毒に思ひ、

源之れく其方は徳右衛門では無いが、實にドウも怒然の事を致した、拙者も只今養父を打たれ大に泣いて居る所だ、定めて其方も二人の伴を殺されて残念の事であらう、併し之れはお父上を殺した奴がお前の伴二人を殺したに違ひない、これは普通の者では無い、餘程腕前の出来る身分のあるものが殺したに違ひない、依て之れより御父上を殺した曲者、草を分けてなりと詮索を致し在所を得て必ず敵打を致すに依つて、さうすれば其方の伴を殺した曲者も分る、兎に角死骸は引取るが宜い」

と云ふ、そこで徳右衛門は最寄の百姓を頼んで子供の死骸を引取り葬式を行ふ、源太郎も養父右近の死骸を我家へ引取り此事を上へ對し御届を致す、右近の葬式は菩提所へ持つて参りまして營む事に成りました。

此事をば早速小倉の武藏の所へ使者を以て知らせます、然るに生憎武藏は病氣でござりまして肥後へ来る事が出来ません、さて源太郎は父を殺したる曲者は

何でも御父上に遺恨のある奴に違ひない、此の曲者は家中の内に在るに違ひないと云ふので大に家中の者に目を着けて居りました、けれども細川仙之助が殺したとは少しも源太郎氣が着かなかつた。

此方は細川仙之助三人を殺し素知らぬ顔を致して居りましたが、誰一人として仙之助と思ふものはござりません、そこで仙之助は此上は源太郎を無きものに致し妻芳江を手に入れやうと云ふ所から、或日淀川新田へ来て庄屋徳右衛門方へ一人遣つて参りました。

仙之れく徳右衛門は居るか、徳へ、

徳右衛門見ると御分家の若様でござりますから、大地に兩手を支きまして、

徳是れはく御分家のお若殿様でござりますか、見苦しい私方へ何の御用があつて御出でになりましたか、仙是れく徳右衛門先達て其方の伴兩人杉田の森に於て何者にか打たれたと申すが寔にドウも怒然の事を致した

マダ敵は分らぬか 徳「左様でござります、倅を殺したものは何者でござりますか、未だに分りません、源太郎様が被仰るには我父を殺したものが其方の倅を殺したに相違ない、乃公が必ず敵を打つて遣るから心配をするなと被仰ります、私は御存じの通り百姓の事、逆も倅の敵が分つたに於て打つ事は出来ません」

仙之助是れを聞いて、

仙「ア、左様か、其方の倅を殺したものは拙者能く存じて居る」と云ふ言葉に徳右衛門驚いた 徳「夫れは若殿様一体何者でござりませう」

仙「夫れは金森右近が其方の倅を殺した、と云ふのは宮本武蔵が大和から連れ來つた源太郎、もと素性の知れざるものを養子に致したから源太郎父の右近に向ひ、マダ私は鶴を一遍も喰へた事がござりませんから、一遍鶴を喰へたいと云つた、すると親と云ふものは馬鹿のもの、右近はドウかして鶴を一遍

源太郎に喰べさして遣りたいと思つて居た、所が前日杉田の森に鶴が居たのを金森右近見付け、殺生禁斷の場所をも辨へず鐵砲にて打ち取つた、然るに其方の倅に見着けられ生かして置いては大變と徳太郎、次郎吉を殺し、そこで自分は若しや此事が表向に相成らば八千石の家は潰れ自分は切腹して相果ればならぬと、大に右近前非後悔をして終に我手に自殺を致したのである、元はと云へば源太郎が鶴を喰へたいと云つたから今日の騒動が出来たのだ、憎い奴は右近父子のものだ」

と、是れを聞いて庄屋徳右衛門大に驚いた、

徳「ヘエ左様でござりますか、そう云ふ事とは夢にも私存じません、して見れば事の起りは源太郎様でありますか、仙さうぢや、だから其方倅二人の仇が打ちたくば乃公が敵を打つて遣る、徳「ドウか若殿様宜しく願ひます 仙「マツた右近が鶴を打つ時には源太郎も同道した、夫れ故其折源太

郎が其場へ落して参つた此處に小刀がある、是れは先達て本家から源太郎が拜領を致した大切の小刀、是れを其方に遣はすに依つて是れを持つて其方町奉行に訴へ出る、又町奉行の方へは余が好しなに申して置くから」と是れより仙之助徳右衛門を煽動し此事を町奉行へ訴へ出させます、是れが爲に金森源太郎不慮の災難を受け御牢内に入らなければならぬと云ふお話を

○意外な出来ごと

細川仙之助が庄屋徳右衛門を欺きまして、源太郎が落した小刀を證據に渡し之れを持つて町奉行所へ訴へ出る、さうすれば必ず其方の伴を殺した敵は打てるからと、固より致して無教育の百姓でござりますから、仙之助の謀計と云ふ事は夢にも知りません、で徳右衛門は町奉行山田五左衛門の役宅へ對して、此の小刀を持つて是れく斯様々と訴へ出しました。

奉行山田五左衛門是れを聞いて大に驚いた、兎に角細川家の客分同様の金森家なれど其の養子源太郎が人殺しをしたと云ふ事を聞いた上は捨て置くには参りませんから、此事を一家老の長岡監物に上申をしやうとしました。然るに折柄監物は病氣でござります、屋敷に引籠つて居りますから、致し方がござりません、そこで次家老の澤村才八郎方へ此事を申達致しますると澤村才八郎は是れは宜い事が出来たと大に喜んだといふのは嘗て此の澤村才八郎の伴が芳江に惚れて居りました、夫れ故縁談を申込んだ所が、終に金森右近から斷られました、是れを常に遺恨に思つて居る、所へ山田五左衛門から此の訴へを聞いて、

才「夫れは容易ならぬ事、譬ひ客分とは言ひながら左様の事を致しては捨て置く譯には相成らぬ、然らば其方早速金森源太郎を引立て参るやうに」と、云ふので山田五左衛門は澤村才八郎の命令に依つて、金森家へ源太郎を

引立てに向ひます、併し是れば普通の者とは違ひまして、兎に角八千石を頂戴致して居る細川家の客分、其支關へ来た山田五左衛門。

五「頼む」と云ふ事に、一人の若侍、支關に取次に出まして、

取次「何御用でござります」 五「源太郎殿在宿を致して居るならば是れへ喚で貰ひたい」

夫れで取次は金森源太郎の所へ来て、

取次「只今町奉行山田五左衛門が罷越し、貴所に御目に懸りたいと申しま

す」

源太郎夢にも知りませんから支關へ来て、

源「是れはく山田氏、何か拙者へ御用でもござるか」

此折山田五左衛門、

五「源太郎殿、貴殿へ對してお尋ねする筋がある、速に町奉行役宅へ同道

を致し喚れまするやう、彼是申さば残念ながら役目に依つて召取り引連れま

する」

源太郎之れを聽いて大に驚いた、何と町奉行所へ引張られるやうな覺へはな

い、併し物は間違ひと云ふ事が幾らもござりますから源太郎は、

源「委細承知を致した、拙者身に對し聞き覺へは毛頭ないが、併し尊公役

目とあれば致し方は無い、速に同道をする」

と、芳江は之れを聽いて大に驚きました、源太郎は芳江に向ひ、

源「之れ芳江、只今町奉行山田五左衛門参り、拙者に對して尋ねる仔細が

あるから町奉行所へ同道をしろと申す、固より拙者は身に聞き所が無いから如

何なる尋ねがあるかは知らぬが是より同道を致す、決して其方は心配する事は

無い、早速に立ち歸つて参るから」

五左衛門は源太郎を町奉行所へ同道を致します、即ち白洲を開いて源太郎を

夫れへ呼び出す。

五「之れ源太郎殿、役目に依つて言葉を改めるから左様心得まするやう、其方へ對して相尋ぬるのは先般、杉田の森に於て殺生禁斷の場所なるにも拘はらず其方は鶴を打ち取り、庄屋徳右衛門の伴兩名を其場に於て殺害を致したるよし見知人あつて、當町奉行所へ訴へ出たが其方覺へがあるかドウぢや

源「之れは思ひも寄らぬお尋れでござります、何で拙者が左様な事を仕りませう、決して私には左様な儀は露、聊かも存じません 五「黙れ、其方覺へないと云ふは卑怯である、確かに其方が殺したに相違ないと云ふ當方には證據がある 源「そのやうな證據がござりますなら拜見を致します、決して私が徳右衛門の伴を殺した覺へは毛頭ござりません 五「然らば只今證據を見せ遣はす」と、山田五左衛門は徳右衛門から差出しました、小刀を其處へ取出します。

五「源太郎、此の小刀に覺へがあるか」

見ると源太郎驚いた、全く自分が主君より拜領を致した小刀に違ひない、之れは父金森右近が最期の折其場に駆け着けたが、其節ドウして落したか其場へ小刀を落しました、早く之れを源太郎上へ届けて置けば何事も無かつたが、父の最期の勲、狼狽致し居りましたから、終に其儘届をしなかつたのが源太郎の誤り、源太郎此の小刀を見て、

源「左様でござります、之れは全く私が先般主君より拜領を致しました小刀に相違ござりません 五「之れ源太郎、此の小刀が其方の持分に相違なければ全く人殺しをしたのは其方に相違あるまい、亦た其方人殺しをした覺へがなければ其場に此の小刀の落ちてある道理が無い、此の小刀のある以上は其方の罪は免れない 源「夫れは迷惑至極のお尋れでござります、成程私は其節悲嘆に呉れ周章狼狽の餘り小刀を取落しました、お届け致さぬのは私の

薄度でござりますが、兩名を殺人などは夢にも存せぬことであります。五「然らば何で其方大切なる所の上より拜領を致した小刀を何ほ慌て居たからと云つて上へ對して其儀を届をしなかつた、其方の身に犯罪あればこそ、此の小刀の遺失を届けては悪事露現をすると云ふ所から今日まで届出さなかつたのだらう、最早此の小刀が證據である速に白狀に及べ。源固より届出さぬは不都合、併し決して私は人殺しをした覺へはござりません」

そこで山田五左衛門が「五「取調へ中、揚り屋入を申付る」

と云ふので、是が爲に源太郎は可愛さうに無罪の災難で揚り屋入と云ふ事に成りました、山田五左衛門から取調への模様を澤村才八郎に申達を致す、澤村才八郎は山田五左衛門に向つて「オ「ドゥだ源太郎は未だ白狀を致さぬか、五「左様でござりますが、なかく剛情の奴、之れは容易の事では白狀を致しません」と澤村才八郎が、

オ「今日大罪を犯したる源太郎、白狀をしないからと云つて、其儘に致して置いては上の御威光に係る、依て明日源太郎を拷問に掛け白狀をさせろ」

五「委細承知を致しました」

と云つて是れから翌日になると源太郎を白洲へ喚び出だし、

五「さて源太郎度々其方へ對して尋れるが今に於て其方は白狀を致さぬ、譬へ其方が何と申しても最早此の小刀が證據であるに依つて其方の罪は免がれぬ、其方も武士では無いが、早く恐れ入つたと服罪に及べ、強つて其方剛情を張れば致し方が無いから今日は拷問を申付る、左様相心得る。源固より私身に覺へなき濡衣、如何なる拷問に掛けられませうとも罪なき事は白狀をする譯には参りません」

何うしても源太郎言はない、そこで五左衛門は組下のものに言ひ付けて三角の木の上に源太郎を坐らせ膝の上に石を載せまして、實に考へて見ると昔は亂

暴の事をしたものです、事實の審問をしないで少し六かしくなると拷問に掛けて白状をさせやうなんかとしたものでだから昔は冤罪と稱へて拷問の苦痛に堪へ兼ねて罪なき事を白状をする者が幾人もあつた、實に考へて見れば壓制極まつた話でござります、是が爲に源太郎は實に拷問の爲に已に生命も斷へんと致します、で其日は第一回の拷問で源太郎を御牢内に下げました、源太郎牢内に於て實に残念だ、身に覺へなき濡衣、何者も左様な訴へを致したか、之れは何ぞ自分に遺恨のあるものが斯様の事を致したに違ひない、此上は拷問の爲に生命を取られればならぬ、實に残念の事である、併し日外や大和に於て源九郎狐を助けた時に、貴所の身に大難のある時は必ず私がお助け申すと言つたが、斯う云ふ時に源九郎狐が乃公を助けて呉れさうなものだ併し人間と違つて畜生の事であるから考へて見ると當にもならない、と源太郎御牢内に於てイロ／＼愚痴を溢して居りました。

〇スツクと立つた白髪の老人

そのうち其中にトロ／＼と眠りが來ましたから思はず知らず源太郎一睡を催しましたすると何者とも知れず「源太郎さん、源太郎さん」と呼ぶ者がある、目を開いて見ると、御牢内の前に一人の白髪の老人立ち現はれ、

老源太郎様、私は源九郎狐でござります、此度の御災難は之れ全く前世の因縁、約束でござりますから私の力では逆も貴所を助ける事は出来ません、定めて貴所は私を恨んで居られませうが、是亦據るござりません、依て此上は人間の力を借りて必ず明日貴所をお助け申します、決して御心配を成さいますな

と、云ふかと思ふと其の姿は消へて了ひました、源太郎之れを聽いて、源「さては源九郎狐、我大難を助けて呉れるか」

と大に喜んで明日を待つて居りますと、
 此方は細川家の一家老の長岡監物は長らくの病氣でござります、引籠つて居りますと或夜の事夜の八ツ頃ひに偶いと目が覺ました、見ると枕許に何やら坐つて居るものがある、枕を上げて監物見ると一人の老人が兩手を支へて居ります、之れを見て監物は、

「監、之れ其方は何者であるか、我部屋に對し何用あつて深夜罷越した、見れば其方は通常の人間とも思はれぬ、定めて余が病氣を附け込で拙者に對して仇を致す所の狐狸妖怪の類に相違あるまい、イザ尋常に生體を現はせ」

と、病氣ながらも傍らにござりました一刀を手許へ引寄せ身構へ致す、と此時に右の老人は監物に向ひまして、

「老、決して私は狐狸、妖怪、變怪の類ではござりません、此度金森源太郎と申すもの無辜の罪にて入牢を致して居ります、夫れを助けん爲に貴所の所

へお知らせに参りました、私は神の使でござります」

之れを聞いて長岡監物は大に驚いた、金森源太郎が牢へ入つて居ると云ふ事は今まで存じません、然るに細川家の爲には客分同様の金森源太郎が入牢を致して居ると云ふのだから大に驚いた、

「監、之れ、ドウ云ふ譯で源太郎が入牢を致して居るか、老、左様でござります、此度杉田の森に於て源太郎様が鶴を打ち取り、庄屋徳右衛門の倅兩名を殺したと云ふ疑ひも係りまして御牢内に入つて居ります、全くアレは源太郎様が殺したのではござりません、細川の御分家若狭守様の御子息仙之助様が鶴を打ち取り、夫れを徳右衛門の倅兩名が見付け、金森右近殿へ注進せんと駆け行く背後から一發兄の方を打ち取り、即ち金森右近殿が徳右衛門の倅、弟、次郎吉と共に現場に来るより、同じく鐵砲にて右近殿を打ち取り逃ぐる次郎吉を追ひ駆け斬り殺しましたので、徳右衛門の倅兩名を殺したのは

まづ仙の助殿に相違ござりません、依て此事を貴所の所へお知らせに参りました、どうか冤罪の罪を受けて居ります源太郎様を助けて頂きたうござります」

初めて之れを聞いた長岡監物、

「監」夫れは容易ならぬ事、譬ひ御分家の若殿たりと雖も、猥に人の命を取ると云ふは法の許さぬ所、之れは捨て置く譯には相成らぬ、だが併し此事を上へ申上たくも承らくの病氣であるに依つて今登城をする事は出来ない」

すると右の老人は、

「老」決して其儀は御心配なさいますな、貴所の御病氣、之れは死病ではござりません、御壽命はナカ／＼長うござります、依て私が貴所の御病氣は今夜の中に御治し申して差上りますから、何うか明日は御登城に相成りまして此事を御取調べを願ひます」

と、云ふかと思ふと老人の姿は極き消すが如くに無くなりました、

長岡監物は「監」實に何うも不思議の事もあるものと思ひました、すると今まで鉢も太儀であつたのが不思議の事には少しも苦痛を感じません、之れは妙だと思つて立つて見ると立てる、今までは腰が重くてナカ／＼立つ事が出来なかつたが、今では腰が軽く丈夫になつたやうな氣持がする、坐敷を歩いて見ると、さつさと歩ける、之れは妙だ、全く病氣が全快をしたに違ひないと、監物大に喜んで、そこで翌朝に相成りますと家來を呼んで、

「監」之れ／＼、家ハッ、監久、振で登城を致すに依つて早速仕度を致せ

家來は驚いた、

「臣」貴所は御病氣で在らせられます、な／＼御登城などは出来ませぬ、監馬鹿を言へ、何時乃公が頼らつて居たか、乃公は決して病氣でも何でもない、此の通り鉢は達者だ、